

多賀城関連遺跡発掘調査報告書第8冊

# 名生館遺跡 III

— 玉造柵跡推定地 —



宮城県多賀城跡調査研究所

# 序 文

古川市大崎に所在する名生館遺跡は奥州探題大崎氏の居城として有名なばかりでなく、この3年間の調査により、古代玉造柵あるいは郡衙である可能性が一段と強まっている。

遺跡は比高10mの河岸段丘に立地し、規模は微地形や遺物の分布状況などから、東西約500m、南北約1,000m程と推定される。昭和55・56年度には、瓦の分布が濃密な城内地区を調査し、四面廂付建物を中心に一本柱による塀で区画された東西52.5m、南北60.6mの官衙中枢部が8世紀初頭に存在したことを始め、7世紀末から9世紀にかけて一貫して玉造郡内の官衙として機能していたことを把握できた。

今年度の第3次調査は、多賀城創建期の瓦が散布し、主要な官衙遺構の存在が想定される小館地区のうち、東半部は昭和45年の土取り工事による遺跡の破壊が著しいため、小館地区西半部を対象とした。その結果、ここでも掘立柱建物跡や竪穴住居跡を多数発見し、この地区が7世紀末頃から8世紀にかけての官衙ブロックの一つであることが判明するなど多大な成果を挙げることができた。

本書はその成果の概要をまとめたものである。特に8世紀初頭頃の官衙の様相がある程度把握できたことは極めて有益であったし、それが東北古代史解明の一資料として活用され、また、本遺跡の保護保存のための一助になれば幸いである。

調査にあたり、有益な御指導、御教示を賜った多賀城跡調査研究指導委員会の諸先生をはじめ、文化庁、古川市教育委員会、調査地を快く提供された地主の小野こしん、門脇幸一郎、門脇政造、渡辺伝治、高橋建弥、門脇敏、佐々木八弥の各氏、調査の準備から埋戻しに至るまでお世話を頂いた笠原良夫氏、自宅を本部に提供された佐々木文夫氏および直接鋤をとられた地元の諸氏に心から感謝の意を表するものである。

昭和58年3月20日

宮城県多賀城跡調査研究所

所長 佐藤 宏 一

# 目 次

序 文	
I. 調 査 要 項	1
II. 多賀城関連遺跡の調査計画	2
III. 遺 跡 の 概 要	3
IV. 第1次・第2次調査の成果	8
V. 調 査 経 過	10
VI. 発見された遺構と遺物	15
1. 小 館 地 区	15
(1) 基本層序	16
(2) 掘立柱建物跡	17
(3) 竪穴住居跡	27
(4) 土 壇	38
(5) 溝・土 塁	42
(6) 第1層・第2層出土の遺物	43
2. 内 館 地 区	44
VII. 考 察	50
1. 小 館 地 区	50
(1) 遺構期の設定	50
(2) 遺構期の年代	54
(3) 小館地区の性格	58
2. 内 館 地 区	58

# 例 言

1. 本遺跡の地区割りは城内地区にある三角点を発掘基準原点(0.0)とする直角座標で設定したものである。発掘基準線の北は第X系座標の北と一致する。本書で用いた方位はすべてこの発掘基準線をもとに計測したものである。
2. 本書の作成にあたっては当研究所の佐藤宏一、進藤秋輝、白鳥良一、高野芳宏、古川雅清、後藤秀一、佐藤則之、佐藤和彦、仲田茂司、千葉孝弥が協議・検討を行い、執筆・編集には主として白鳥良一と仲田茂司があたった。またこれらの作業を石川勝子、高橋みずほ、我妻悦子、千葉みどり、伊藤和子、平山三津子、和田容子、岡田富子が援けた。

# I. 調査要項

1. 遺跡名 名生館遺跡
2. 所在地 宮城県古川市大崎字名生館、城内、名生小館、名生北館、弥栄
3. 調査主体 宮城県教育委員会（教育長 三浦 徹）
4. 調査共催 古川市教育委員会（教育長 千田清志）
5. 調査期間 昭和57年10月15日～12月20日
6. 調査顧問 多賀城跡調査研究指導委員会委員長・東北大学名誉教授 伊東信雄
7. 調査担当者 宮城県多賀城跡調査研究所長 佐藤宏一
8. 調査員 宮城県多賀城跡調査研究所：進藤秋輝、白鳥良一、高野芳宏、古川雅清、後藤秀一、佐藤則之、佐藤和彦、仲田茂司、千葉孝弥  
東北歴史資料館：藤沼邦彦、岡村道雄、伊藤 信、千葉景一、薩日内良則、村山斌夫、吉沢幹夫  
築館女子高等学校：金野 正、古川工業高等学校：三宅宗議  
古川市教育委員会社会教育課：伊藤 隆、石川芳男、千葉 功、相沢広務、吉田功男、中村広志
9. 調査参加者 佐々木茂楨、万城目喜一、二郷 等、石川勝子、千葉みどり、我妻悦子、高橋みずほ、平山三津子、和田容子、伊藤和子、岡田富子、斗ヶ沢文子、滝川ちかこ、菅井美由紀、大貫由美子、福原志美子、伊藤康子、笠原良夫、佐々木文夫、笠原良助、高城春夫、佐々木八弥、大場正志、門脇幸一郎、佐々木善右ヱ門、菅原利惣七、加藤利男、中村鉄夫、高城キヨ子、笠原ましゑ、菅原たよ、大場とよ子、笠原トシコ、鹿野田洋子、佐々木はつえ、佐々木もとよ、加藤みき子、鹿野千恵子、鹿野みさ子、笠原すみ子
10. 調査協力者 地主：佐々木八弥、渡辺伝治、門脇幸一郎、門脇政造、小野こしん、門脇敏、高橋建弥  
本部提供：佐々木文夫

## II. 多賀城関連遺跡の調査計画

当研究所では古代の陸奥国府である多賀城跡について、年次計画に基づいて継続的な調査・研究を行い、その解明に努めている。

一方、宮城県内には多賀城跡の他に、玉造柵、新田柵、牡鹿柵、色麻柵、桃生城、伊治城、中山柵、覚鸞城など文献に名を残す城柵をはじめとして、古川市宮沢遺跡、中新田町城生遺跡、仙台市郡山遺跡など文献に名の残らない城柵官衙遺跡や、色麻町日の出山窯跡群をはじめ、多賀城などへ瓦を供給した窯跡などの生産遺跡が存在する。これらは陸奥国府多賀城と密接に関連するものであり、多賀城を有機的に理解するうえで必要不可欠な遺跡である。

そこで、当研究所では、多賀城跡調査研究指導委員会（委員長 伊東信雄東北大学名誉教授）の指導のもとに多賀城関連遺跡調査計画を策定し、これらの遺跡の調査・研究を行っている(表1)。

昭和49年度を初年度とする第1次5か年計画では桃生城跡と伊治城跡の発掘調査を実施し多大な成果を収めた。

昭和54年度からは第2次5か年計画に入り、初年度の伊治城跡に引き続き、第2年次からは名生館遺跡の発掘調査を実施している。今回の調査は第2次5か年計画の第4年次の調査にあたり、名生館遺跡の第3次の調査である。調査は、多賀城創建期の瓦が散布しており、城内地区と同様に主要な官衙地区と考えられている小館地区の畑地を対象として実施した(多賀城関連遺跡調査費7,000千円、うち50%国庫補助)。

なお、名生館遺跡については昭和58年度も今回に引き続き、小館地区を対象とした発掘調査を予定している。

	年度	遺跡名	事業	内容	報告書
第1次5か年計画	49年度	桃生城跡	地形図作成・第1次発掘調査	内郭地区および外郭線の調査	多賀城関連遺跡発掘調査報告書第1冊「桃生城跡Ⅰ」
	50年度	桃生城跡	第2次発掘調査	同上	第2冊「桃生城跡Ⅱ」
	51年度	伊治城跡	地形図作成		
	52年度	伊治城跡	第1次発掘調査	外郭線および郭内の調査	第3冊「伊治城跡Ⅰ」
	53年度	伊治城跡	第2次発掘調査	郭内の調査	第4冊「伊治城跡Ⅱ」
第2次5か年計画	54年度	伊治城跡	第3次発掘調査	同上	第5冊「伊治城跡Ⅲ」
	55年度	名生館遺跡	地形図作成・第1次発掘調査	城内地区の調査	第6冊「名生館遺跡Ⅰ」
	56年度	名生館遺跡	第2次発掘調査	同上	第7冊「名生館遺跡Ⅱ」
	57年度	名生館遺跡	第3次発掘調査	小館・内館地区の調査	本書
	58年度	名生館遺跡	第4次発掘調査	小館地区の調査	

※昭和57年度までは実績、昭和58年度は予定。

第1表 多賀城関連遺跡調査計画

### Ⅲ. 遺跡の概要

名生館遺跡は古川市大崎に所在する。遺跡は多賀城跡の北約30kmに位置し、北の江合川と南の鳴瀬川の両河川の流域に広がる籠岳、玉造、大松沢の各丘陵に囲まれた大崎平野の北西端にあたる。また、江合川の南岸には標高約40m、沖積地との比高約10mの河岸段丘が北西から南東に延びており、遺跡はこの段丘の東南端付近に立地している(第1図)。

本遺跡は、北と東は段丘崖によって画され、南は小館地区の南側に東から入り込む小さな沢によって限られている。一方、西側は段丘上の平坦面が続き、遺跡がどこまで延びるのは地形的には判然としない。こういった状況から、本遺跡の範囲は南北約1,000m、東西は遺物の散布状況からみて少なくとも500mほどであると思われる。遺跡地は現在大部分が畑地として利用されており、一部は水田や宅地となっている(第2図)。

この地区は現在古川市に属しているが、「和名類聚抄」の玉造郡俯見郷にあたりとみられる「伏見」が本遺跡の南約1kmにあることから、古代にはこの地区が玉造郡に属していたことはほぼ間違いがないとされている。

遺跡内には古代の土器や瓦が散布しているのをはじめ、中世の土塁や空堀が遺存している。このうち、古代の瓦の散布は城内地区と小館地区の2か所に集中している。両地点から出土する瓦は文様や製作技法に違いがみられ、城内地区の瓦が山田寺系単弁蓮花文軒丸瓦、ロクロ挽き重弧文軒平瓦であるのに対し、小館地区の瓦は多賀城創建期の重弁蓮花文軒丸瓦である。また、本遺跡は中世に奥州探題大崎氏の居城である名生城が築かれた場所でもあり、土塁や空堀などが残る他、「名生館」「城内」「小館」「北館」「内館」などの地名に当時の名残をとどめている。なお、内館地区からは多量の炭化米が採集されており、倉庫等の存在が予想された。

本遺跡は古くから研究者に注目されてきている。最初に文献に名がみえるのは、寛政10年(1798)に里見藤右エ門が著した「封内土産考」である。里見は本遺跡出土の布目瓦に注目し、その製作法について鋭い指摘をしたが、瓦は中世大崎氏に関わるものとしている(註1)。次いで明治年間には、本遺跡出土の瓦は古代のものとみられるようになり、原秀四郎は「寺院は瓦葺き」という当時の定説に従って、本遺跡を寺院跡とした(註2)。大正年間には、鈴木省三はこの地区を踏査し、「玉造軍団跡」に擬定した。鈴木はその中心施設を伏見宝龍社(伏見廃寺跡)とし、本遺跡をその付属施設跡とみた(註3)。戦後になると、当時古川工業高校教師であった佐々木忠雄による踏査により、本遺跡の瓦が伏見廃寺跡の瓦と同種のものであることが判明した。昭和45年に佐々木茂楨は伏見廃寺跡の発掘調査を行い、



第1図 名生館遺跡位置図

- |          |           |            |          |             |
|----------|-----------|------------|----------|-------------|
| 1. 名生館遺跡 | 2. 伏見廃寺跡  | 3. 宮沢遺跡    | 4. 城生遺跡  | 5. 菜切谷廃寺跡   |
| 6. 一の関遺跡 | 7. 大吉山窯跡群 | 8. 小林杉ノ下窯跡 | 9. 三輪田遺跡 | 10. 日の出山窯跡群 |



第2図 名生館遺跡の地形図

第1・2次調査地区  
 第3次調査地区



金堂跡と推定される基壇とその周辺から多量の瓦を発見し、この寺跡を俯見公の氏寺と推定し、瓦の年代を平安時代と位置つけた。さらに本遺跡を、同種の瓦が出土することから「玉造塞」に比定した(註4)。その後、進藤秋輝により伏見廃寺跡出土瓦の再検討がなされ、この瓦が様式的・技法的に多賀城の創建瓦より遡るものであることが推定された(註5)。さらに、本遺跡の小館地区からは、土取り工事の際多量の多賀城創建瓦が採集され、本遺跡と奈良時代の玉造柵との関係が一段と注目されてきた。

ところで、本遺跡の周辺には多賀城と密接な関連をもつ城柵官衙遺跡、寺院跡、生産遺跡が数多く存在する。

本遺跡の南約1kmには前述の伏見廃寺跡があり、基壇と多数の瓦などが発見されている(註4)。また、江合川を挟んで対岸の東方約5kmには奈良時代後半から平安時代にかけての城柵官衙遺跡である宮沢遺跡がある。調査の結果、外郭線は時期が異なる築地や土塁であり、規模は東西約1,400m、南北約850mで平面形は不整形をなすことが判明している(註6)。この宮沢遺跡の東南隅に近接して三輪田遺跡があり、ロクロ挽き重弧文や偏行唐草文の軒平瓦が出土している(註7)。一方、本遺跡の南西約5kmには城生遺跡とその付属寺院である菜切谷廃寺跡がある。城生遺跡は一辺約350mの方形であり、周囲は築地によって区画されている(註8)。また菜切谷廃寺跡では金堂とみられる東西12.7m、南北10.8mの乱石積基壇と多量の多賀城創建期の瓦が発見されている(註9)。さらに、本遺跡の南約9kmには、規模・基壇化粧等で菜切谷廃寺金堂と酷似する基壇をはじめ、多数の掘立柱建物跡が検出された色麻町一の関遺跡がある(註10)。

また、この地域の丘陵には多賀城創建期の瓦窯が集中して営まれている。本遺跡の東約2km、江合川の対岸には大吉山窯跡群があり、南約10kmには日の出山窯跡群がある(註11)。

註1. 里見藤右門「封内土産考」(『仙台叢書』第3巻 復刻版 1981)

註2. 原秀四郎「玉造塞址につきて」『史学雑誌』第19巻18号 1903

註3. 鈴木省三「玉造軍団及名生城」『宮城県史跡名勝天然記念物調査報告書第二輯』1924

註4. 佐々木茂禎「宮城県古川市伏見廃寺跡」『考古学雑誌』第56巻3号 1971

註5. 進藤秋輝「東北地方の平瓦桶型作り技法について」『東北考古学の諸問題』1976

註6. 宮城県教育委員会「宮沢遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ』1980

註7. 古川市教育委員会『三輪田遺跡』古川市文化財調査報告書第4集 1980

註8. 中新田町教育委員会『城生遺跡』中新田町文化財調査報告書第1・2・4～6集 1978～1982

註9. 伊東信雄『菜切谷廃寺跡』宮城県文化財調査報告書第2集 1956

註10. 宮城県教育委員会「一の関遺跡」『宮城県文化財発掘調査略報(昭和51年度分)』1977

註11. 宮城県教育委員会『日の出山窯跡群』宮城県文化財調査報告書第22集 1970

## Ⅳ．第1次・第2次調査の成果

第1・2次調査は、多賀城創建期の瓦より古いとされている山田寺系単弁蓮花文軒丸瓦などが集中的に散布する城内地区の水田約3,600㎡を対象として実施したものである。調査の結果、掘立柱建物跡26、一本柱列による堀跡4、竪穴住居跡44のほか多数の土壇や溝などを検出した(第3図)。これらの遺構は重複関係や遺構の方向と規則性、出土遺物などからA、B、C<sub>1</sub>、C<sub>2</sub>、Dの5期に大別された。各期の様相は以下のとおりである。

〔A期〕 7世紀末頃の時期で、掘立柱建物跡7と土壇1がある。この時期の建物跡の特徴は、方向が発掘基準線にほぼ一致するものが多く、柱穴が0.3m～0.5mと小規模で、埋土が黒色土であることなどである。

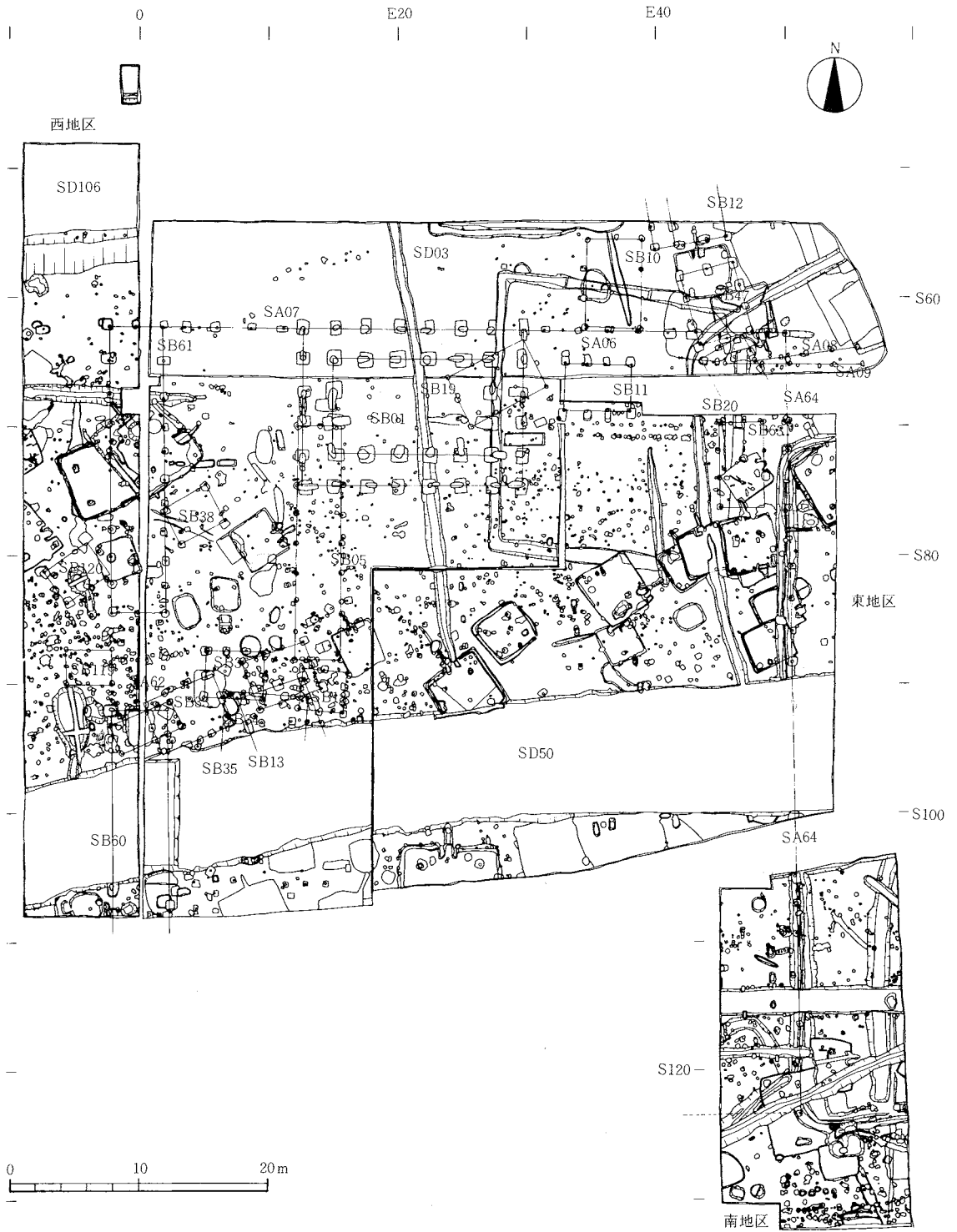
〔B期〕 8世紀初頭頃の時期で、掘立柱建物跡4と一本柱列による堀跡4がある。この時期の遺構の特徴は、建物跡・堀跡の方向が発掘基準線に一致し、柱穴が一辺1.0m～1.2mの方形で、埋土が黒色土と黄褐色地山土との互層をなすことである。これらは、四面廂付き建物跡を中心建物とし、西には柱筋の揃う2棟の南北棟を配し、これらの建物に接続する堀跡によって、方形に区画された一郭を形成している。方形区画は東西52.54m、南北60.64mである。また、四面廂付き建物跡の東には北側柱列をこの建物跡の北入側柱列に揃えた東西棟がある。なお、中心建物である四面廂付き建物跡は瓦葺きであったことが確認された。

〔C<sub>1</sub>期〕 8世紀後半頃の時期で、掘立柱建物跡2と溝1がある。この時期の遺構の特徴は、建物跡・溝跡の方向が発掘基準線にほぼ一致し、建物跡の柱穴が1辺0.5m～0.7mの方形でB期に比べてやや小さいことなどである。

〔C<sub>2</sub>期〕 8世紀後半から9世紀の時期で、掘立柱建物跡9、竪穴住居跡12、溝4がある。この時期の建物跡の特徴は、方向が発掘基準線に対し、北で西へ15度～30度前後振れており、柱穴が1辺0.6m程の方形で、埋土が暗褐色土または褐色土であることなどである。

〔D期〕 15世紀頃の時期で、溝2がみられる。古代の遺構を切っており、中世大崎氏の名生城に関わるものである。

以上のような成果から、本遺跡は7世紀末から9世紀までの長期間にわたり継続的に営まれた城柵官衙遺跡であり、C<sub>2</sub>期の遺構から出土した「玉厨」の墨書土器などから古代玉造郡で中心的な役割を果たしていたと推定された。



第3図 名生館遺跡城内地区遺構全体図

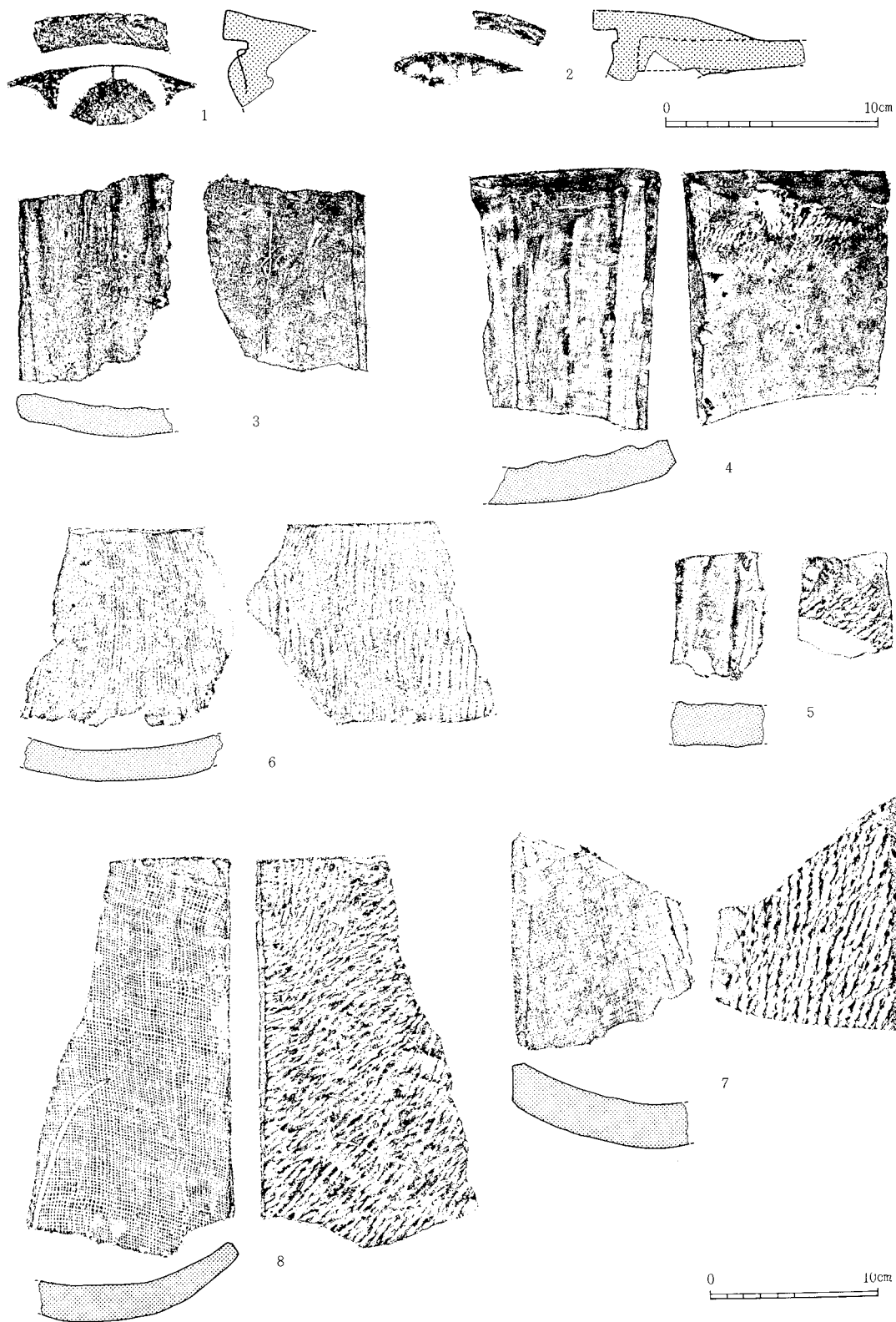
## V. 調査経過

今回の調査は、第1次・2次調査を実施した城内地区の南約500 mに位置する小館地区と、北約200 mに位置する内館地区の2地区を対象として実施した。

小館地区は城内地区と共に本遺跡内で瓦が散布することで早くから注目されていた場所である。しかし、昭和45～48年にこの地区で大規模な土取工事が行われ、国鉄陸羽東線の東側地区は大きな削平を受けてしまい、辛うじてこの際に出土した土器や瓦が佐々木茂植氏および万城目喜一氏によって採集され、保管されていた。佐々木氏のご好意により、この資料を借用し、分類した結果、軒丸瓦2点、丸瓦18点、平瓦66点がみられた(第4図)。軒丸瓦には、蓮弁の先端が高く盛り上がる多賀城跡の軒丸瓦130にきわめて近似した重弁蓮花文軒丸瓦(1)と、色麻町一の関遺跡から出土し「素弁蓮花文」とされているものに特徴が類似したもの(2)とがある。丸瓦で特徴がわかるものはすべて粘土紐巻き作りで、玉縁をもつ有段のものである。平瓦にはA：桶巻き作りで凸面凹面ともにナデ調整のもの51点(3)、B：桶巻き作りで凸面ナデ調整、凹面布目のもの2点(4)、C：桶巻き作りで凸面縄叩き目、凹面布目のもの1点(5)、D：凸面平行叩き目で凹面ナデ調整のもの2点(6)、E：凸面縄叩き目で凹面ナデ調整のもの2点(7)、F：凸面縄叩き目で凹面布目のもの8点(8)がみられる。これらのうち多賀城の軒丸瓦130に近似した軒丸瓦は多賀城創建期のもものとみられ、平瓦でA・Bとしたものもやはり同時期と考えられるものであり、平瓦の約8割を占めている。これらの小館地区の土取工事で出土した瓦は、城内地区から出土した多賀城創建期よりやや年代が古いと考えられる山田寺系の単弁蓮花文軒丸瓦、ロクロ挽き重弧文軒平瓦、行基式の無段丸瓦、桶巻き作りで凸面に花文叩き目をもつ平瓦との組合せとは特徴を全く異にしており、このことから城内地区のB期の官衙中枢部に後続するものがこの地区に存在したことが想定された。したがって、今回の調査ではこの地区に想定される官衙中枢部を検出することに主眼をおくこととした。

調査に先立ち、地形図により段丘面の地形復元を行った結果、陸羽東線の東側は、土取工事によりすでに2～3 mほどの削平を受けていることが判明したため、旧地形が残る陸羽東線の西隣接地を選び、先の目的に加えて、小館地区における遺構の変遷、および当地区の南端部にある土塁の構造と年代を把握することとした。

内館地区については、この地区の畑地に多量の炭化米が散布することから、古代の倉庫跡の存在が予想されたため、その解明の手がかりを得ることを目的として調査を実施することにしたものである。



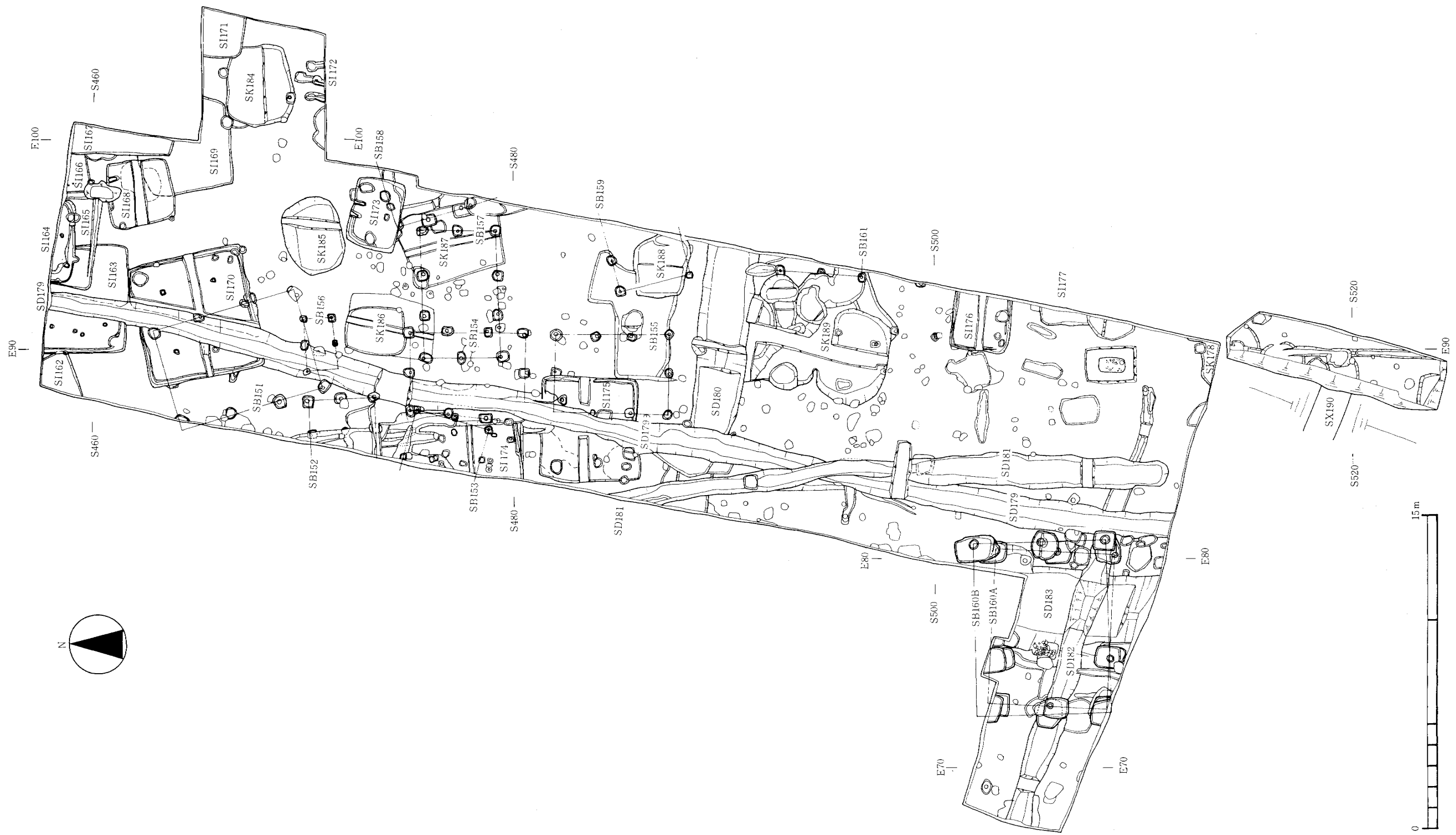
第4图 小館地区採集瓦(佐々木茂楨氏所蔵)

調査は10月15日に開始し、発掘器材を搬入して小館地区に東西約13m、南北約56mの調査区を設定した後、10月16日から表土剥ぎに取りかかった。その結果、調査区の北半部では厚さ0.3m～0.4mの表土下に黒褐色火山灰を主体とする古代の旧表土がみられたが、南半部では両層の間に古代から中世にかけて堆積したとみられる第2層が分布しており、その上面でSD179・180・181・182溝などが検出された(11月1日)。北半部ではこれらの溝に重複して多数の竪穴住居跡が存在することが判明したため、溝相互の新旧関係を確認し、縮尺1/100の略実測を行った。その後、11月4日からこれらの溝を掘り下げ、ついで第2層を除去した。

旧表土上面ないし地山面で遺構検出に努めたところ、調査区の北端部付近ではSI170などの多数の竪穴住居跡が重複していることや、南半部にはSK189土壇やSI176住居跡などが存在すること、および南西端で当初土壇とみていたものが後にSB160とした掘立柱建物跡の大規模な柱穴であることなどが明らかになった。そのため11月6日には調査区南端の西側に幅6mの拡張区を設定し、SB160建物跡の検出にあたったところ、その西側柱列が検出され、これが東西3間、南北2間の掘立柱建物跡で、2時期の重複をもつことが判明した(11月13日)。これと併行して11月9日にはその他の検出遺構の精査を開始した。竪穴住居跡の多くは調査区外まで延びているため、それらについては平面形と新旧関係を確認するのみにとどめ、全形を検出した住居跡を中心に精査を行った。旧表土上面や地山面でさらに遺構検出を進めたところ、新たに小規模な柱穴をもつ多数の掘立柱建物跡が検出され、建物の軸線にはほぼ真北方向のものと、西ないし東に大きく偏するものがあることが知られた。両者の新旧関係は真北方向の建物跡が西ないし東に偏するものを切ってより新しいものであった。

これらの調査と併行して11月1日からは土塁部分の杉の抜根および土塁の断ち割り調査を実施した。その結果、この土塁は基底幅約8.8m、高さ約2.5mの大規模なもので、第2層上面に南側から順次盛土して築かれており、中世の名生城に関わるものと考えられた。

一方、内館地区については11月8日に東西51m、南北6mの調査区を設定し、翌日から表土剥ぎを開始した。厚さ約0.3mの表土を除去したところ、調査区の東半部には旧表土とみられる黒褐色火山灰を主体とする層が分布していたが、西半部は表土下がすぐ地山であった。遺構の検出作業を行った結果、旧表土上面および地山面で竪穴住居跡、柱列、中世の名生城に関わるとみられる多数の溝、土壇などが発見され、この地区にも古代から中世にかけての遺構が存在することが判明した。これらのうち、中世のSD195溝より新しいSK196土壇の堆積土上層には多量の炭化米が含まれていたことから、内館地区の畑地に散布する炭化米はこの時期の遺構に起因するものと考えられた。



第5図 小館地区検出遺構全体図

11月29日以降は両地区の平面図および断面図の作成に取りかかり、ついで遺構写真の撮影を行った。その後、若干の補足調査を行い12月20日にすべての作業を終了した。この間、11月27日には現地説明会を開催して調査の成果を報道関係者と一般に公開した。

なお、今回の調査面積は小館地区 850 m<sup>2</sup>、内館地区 306 m<sup>2</sup>の計 1,156 m<sup>2</sup>である。

## VI. 発見された遺構と遺物

今回の調査で発見された遺構と遺物について、小館地区、内館地区の順に記述してゆく。

### 1. 小館地区

小館地区で検出したおもな遺構には掘立柱建物跡11、竪穴住居跡16、土壇6、溝5、土塁1などがある(第5~7・9図)。また、調査区内には3層の自然堆積層が認められた。これらの遺構や堆積層から出土した遺物には土師器、須恵器、瓦、紡錘車、土製支脚、砥石、鉄鎌、鉄斧、鉸具、刀子、金環などがある。このうち、出土量の多い土師器、須恵器のおもな器種についてはあらかじめ以下のように分類しておき、それをもとに各遺構における様相を述べることにする。

〔土師器〕土師器はすべて非ロクロ調整のものである。以下杯と甕について分類しておく。いずれも全形を復元できたものが少ないため、技法上の特徴を中心に分類する。

杯は内面調整の特徴によりⅠ類：ヘラミガキ調整され、黒色処理が施されているもの(以下では内黒という)と、Ⅱ類：ナデ調整され、黒色処理が施されていないもの(以下では非内黒という)とに大別される。Ⅰ類は在地の土器で、外面の調整によりさらにA：口縁部がヨコナデ調整されているものと、B：口縁部がヘラミガキ調整されているもの、に細分される。ⅠA類の底部は丸底ないし丸底気味の平底で、体部の器形では、1：外面の口縁部と底部の境に段または稜をもち、内面にそれに対応する屈曲があるもの、2：外面には段や稜をもつが内面には屈曲がないもの、3：外面、内面いずれにも段や稜、屈曲をもたないもの、に分けられる。ⅠB類には外面が、1：黒色処理されているものと、2：黒色処理されていないものがある。ⅠB類で器形のわかるものは、すべて外面・内面いずれにも段や屈曲をもたないものである。Ⅱ類は関東地方の土師器の特徴をもつ土器で、外面はすべて口縁部がヨコナデ調整、底部がヘラケズリ調整されている。底部は丸底ないし丸底気味の平底で、すべて内湾しながら外傾するが、口縁部の器形では、A：鋭く外反する



もの、B：ゆるやかに外反するもの、C：直線的に外傾するもの、D：直立するもの、E：底部から口縁部まで連続的に内湾しながら外傾するもの、F：内反するもの、に細分される。これらのうち、II A類、II B類、II D類、II F類のものは口縁部外面に段ないし軽い稜をもつものが多い。また、底部のわかる資料では、II A類、II B類、II D類、II F類は丸底で、II E類には丸底のものと丸底気味の平底の両者がみられ、II C類は丸底気味の平底である。

甕は大部分が破片資料で、しかも部位によって特徴が異なるため統一的な基準で分類できるものは少いが、ある程度器形が推定し得る資料は、I類：口縁部に最大径をもつ長胴形のもの(長胴甕)、II類：胴部に最大径をもつ胴張形のもの(胴張甕)、III類：口縁部に最大径をもち、I・II類に較べて器高が低く、口径と器高の比が1前後のもの(小形甕)、に分類することができる。I類のものは胴部外面の調整によりさらにI A類：ハケ目調整のものと、I B類：ヘラケズリ調整のものに細分することができる。

〔須恵器〕 須恵器では出土量の多い杯についてのみ分類しておく。

杯には器形的にみて顕著な差異はほとんど認められない。したがってロクロからの切離し技法および切離し後の調整とその範囲の組み合わせにより分類する。切離し技法には、I：静止糸切りのもの、II：ヘラ切りのもの、III：糸切りのもの、IV：底部全面にケズリやナデが加えられ、切離しが不明のもの、がみられる。切離し後の調整には、A. 調整を全くうけないもの(以下無調整と呼ぶ)、B. 手持ちヘラケズリされるもの、C. 回転ヘラケズリされるものがある。これらについて調整する範囲をみると、1. 底部のみ調整するもの、2. 底部と体部下端に調整のあるもの、の2者がみられる。これらの組み合わせにより、杯はI B 2類、I C 2類、II A類、II B 1類、III A類、IV B 2類、IV C 1類、IV C 2類に分類される。

以下、まず基本層序について述べ、ついで各遺構について遺構の種類ごとに概要を説明する。

## (1) 基本層序

調査区の層序は基本的に3層に大別できる。

第1層 畑の耕作土で、調査区全体を覆っている。厚さは調査区北端部で約0.3 mで、南へ行く程厚く、南端部では厚さ約0.8 mとなり部分的にさらに3層ほどに細分される。

第2層 褐色土や暗褐色土を主体とする層で、調査区の北半部および南端部に分布する。この層は場所によって土色や土性が若干異なり、南端部ではさらに3層に細分されるが、いずれも古代の遺構を覆い、上面からは中世の遺構が検出されている。厚さは北半部で約

0.2m、南端部では約0.4mである。この層からは古代の遺物が比較的多く出土している。

第3層 黒褐色の火山灰を主体とする層で、調査区のほぼ全体に分布している。この層は地山の黄褐色ローム層上に直接堆積しており、古代の遺構はすべてこの層の上面で検出されている。厚さは調査区の北端部で約0.25mと比較的厚く、南端部では約0.1mと薄い。遺物は全く出土していない。

## (2) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は11棟検出されている。その多くは調査区の北半部に集中し、南半部では1棟検出されたのみである。これらの建物跡はすべて第3層上面で検出されており、第2層が分布する地域ではすべてそれに覆われている。以下北から順に説明を加える。

### SB151建物跡（第6図）

調査区北西部で検出した桁行3間、梁行2間の南北棟掘立柱建物跡である。本建物跡はSB156建物跡、SI170竪穴住居跡、SD179溝と重複しており、SI170・SD179より古いが、SB156とは直接切り合いがなく新旧関係は不明である。またSB152建物跡とは近接していることから、同時には存在し得なかったと考えられる。柱穴は南妻棟通り下および北西隅の柱穴を除く8個を検出しており、うち3個の柱穴で径0.2m前後の円形の柱痕跡を確認している。柱痕跡が判然としなかった柱穴ではその中央に柱位置を想定すると、規模は桁行が約6.9m、梁行が約4.8mで、柱間は桁行が東側柱列で南から2.3m+2.3m+2.3m、西側柱列で南から2.15m+2.4m+(1間分不明)、梁行は北妻で東から2.4m+(1間分不明)となり桁行が約2.3m等間、梁行が約2.4m等間であったとみられる。建物の方向は2個の柱痕跡が確認された西側柱列で測るとN17°Wである。柱穴は0.5m×0.6mほどの隅丸長方形で、深さは最も保存の良いもので約0.4mであり、埋土は黒褐色土で一手に埋められている。遺物は出土していない。

### SB156建物跡（第6図）

調査区北西部で検出した東西2間、南北1間の小規模な東西棟掘立柱建物跡である。本建物跡はSB151建物跡、SD179溝と重複しており、SD179より古いが、SB151との新旧関係は確認できなかった。また、本建物跡の北側柱列は西約1.3mに位置するSB152建物跡の北側柱列に柱筋がほぼ一致している。柱穴は南西隅の柱穴を除く5個を検出しており、うち3個の柱穴で径0.12m前後の円形の柱痕跡を確認している。柱間は柱痕跡が判然としなかった柱穴ではその中央に柱位置を想定すると、桁行が北側柱列で東から1.25m+1.25mで総長約2.5m、南側柱列で東から1.25m+(1間分不明)、梁行が東妻で約1.3mとなる。建物の方向は2個の柱痕跡が確認された南側柱列で測るとE3°Nである。柱穴は一辺が

0.3m前後の不整形で、埋土は黒褐色土である。深さは断ち割り調査を行っていないため不明である。

遺物は柱痕跡から土師器甕の胸部破片が1点出土している。

#### SB152建物跡（第6図）

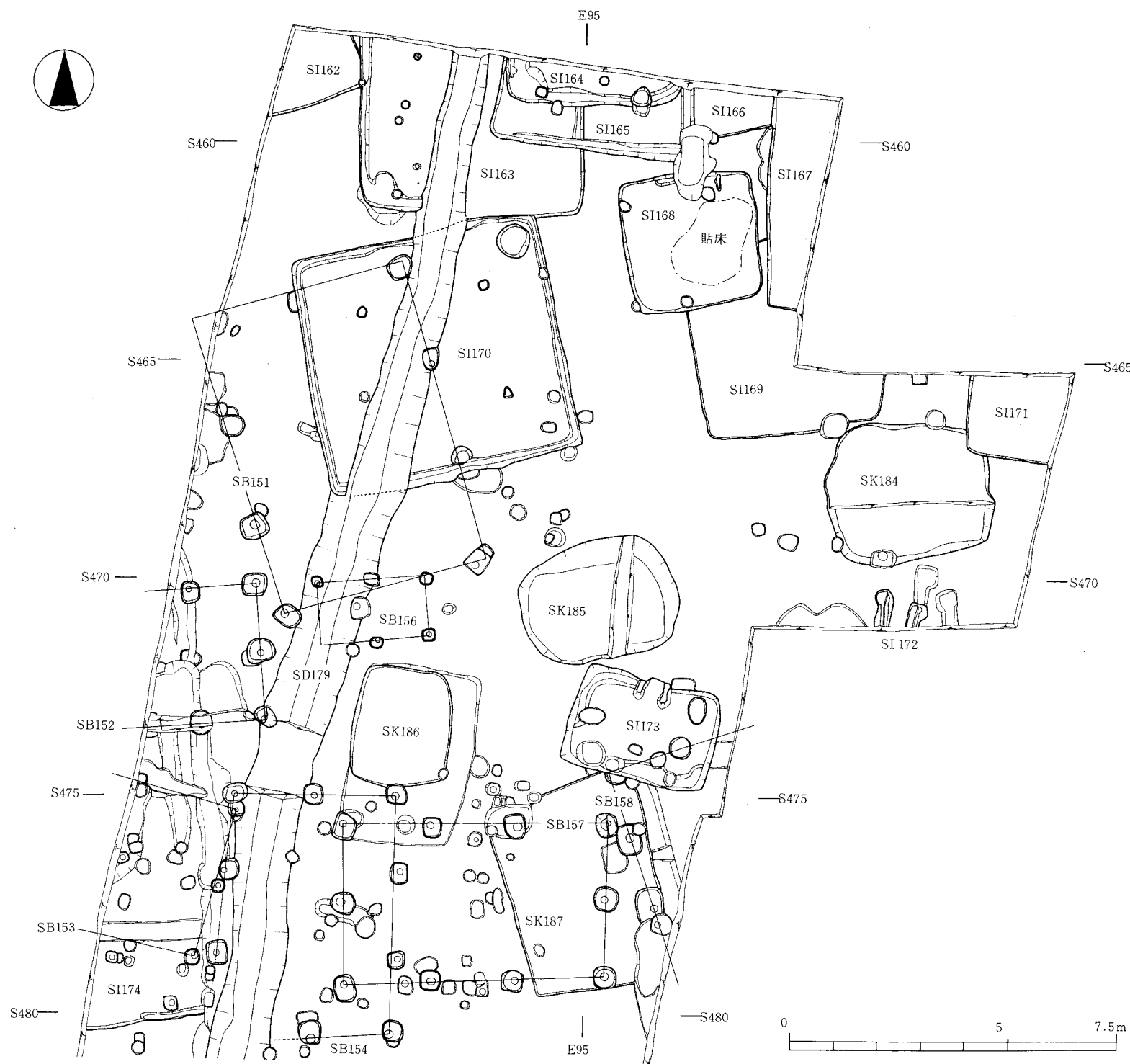
調査区北西部で検出した南北2間、東西2間以上の掘立総柱建物跡で、調査区の西端に位置していることから、さらに西に延びる可能性がある。本建物跡はSD179溝と重複しており、これより古い。また、SB151建物跡とは近接していることから同時には存在し得なかったと考えられる。さらに、本建物跡の北側柱列は東に位置するSB156建物跡の北側柱列と柱筋がほぼ一致している。柱穴は7個検出しており、うち4個の柱穴で径約0.2mの円形の柱痕跡を確認している。柱間は東側柱列で南から1.55m+1.60mで総長3.15m、北側柱列で1.59mである。建物の方向はすべての柱痕跡が確認された東側柱列で測ると、N2°Wである。柱穴は一辺が0.5m前後の不整形で壁は斜めに掘られており深さは0.5mほどである。埋土は地山ブロックを含む黒褐色土で、3層に突き固められている。遺物は出土していない。

#### SB153建物跡（第6図）

調査区北西部で検出した南北2間、東西1間以上の掘立柱建物跡で、調査区の西端に位置していることからさらに西に延びて東西2間以上の建物になる可能性がある。本建物跡はSB154建物跡、SI174竪穴住居跡、SD179溝と重複しておりこれらより古い。柱穴は東側柱列と北側柱列で計4個検出しており、すべての柱穴で径0.15m前後の円形の柱痕跡を確認している。柱間は東側柱列で南から1.67m+1.86mで総長3.53m、北側柱列で2.28mである。建物の方向は東側柱列で測るとN16°Eである。柱穴は一辺が0.3m前後の方形で、埋土は暗褐色土である。深さは断ち割り調査を行っていないため不明である。遺物は出土していない。

#### SB154建物跡（第6図）

調査区北半部で検出した南北3間、東西2間の南北棟掘立柱建物跡である。本建物跡はSB153・SB157建物跡、SK186土壇、SD179溝と重複しており、SB153・SK186より新しく、SD179より古い。SB157とは直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。また本建物の南約1.3mに位置するSB155建物跡とはほぼ同規模で棟通りの柱筋が一致している。柱穴はSD179に壊されている南西隅の柱穴を除く9個を検出しており、すべての柱穴で径0.15m前後の円形の柱痕跡を確認している。建物の規模は平面形に歪みがあるが、桁行が東側柱列で5.41m、梁行が北妻で3.68mである。柱間は桁行が東側柱列で南から1.75m+1.96m+1.70m、梁行が北妻で東から1.85m+1.83mである。ただし、東側柱列では柱痕



第6図 小館地区遺構図(1)

跡が直線上に並ばず、また西側柱列では柱痕跡を結ぶ線が南で大きく西に偏している。建物の方向は、南北両妻の棟通り下の柱痕跡を結ぶ線で測るとほぼ真北に一致している。柱穴は一辺が0.5 m前後の不整形で、壁はほぼ垂直に掘られ、深さは約0.5 mである。埋土は黒褐色土や極暗褐色土を主体とし、2～3層に突き固められている。

遺物は柱穴埋土と柱痕跡から土師器甕の破片がそれぞれ2点ずつ出土している。

#### SB157建物跡（第6図）

調査区北半部で検出した東西3間、南北2間の東西棟掘立柱建物跡である。本建物跡はSB154・SB158建物跡、SK187土壇と重複しており、SB158、SK187より新しいが、SB154とは直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。柱穴は10個すべてを検出しており、いずれにも径0.18 m前後の円形の柱痕跡を確認している。建物の規模は平面形がやや歪んでいるが、桁行が南側柱列で6.00 m、梁行が東妻で3.50 mである。柱間は桁行が南側柱列で東から2.04 m + 1.94 m + 2.02 m、北側柱列で東から2.06 m + 2.02 m + 2.00 m、梁行が東妻で南から1.74 m + 1.76 m、西妻で南から1.85 m + 1.81 mである。この建物の方向は東妻が真北に一致しているが、南側柱列は西で2度南に偏している。柱穴は一辺が約0.5 mの不整形で壁はほぼ垂直に掘られ、深さは約0.5 mである。埋土は黒褐色土や地山ブロックを含む黄褐色土を主体とし、2～3層に突き固められている。遺物は出土していない。

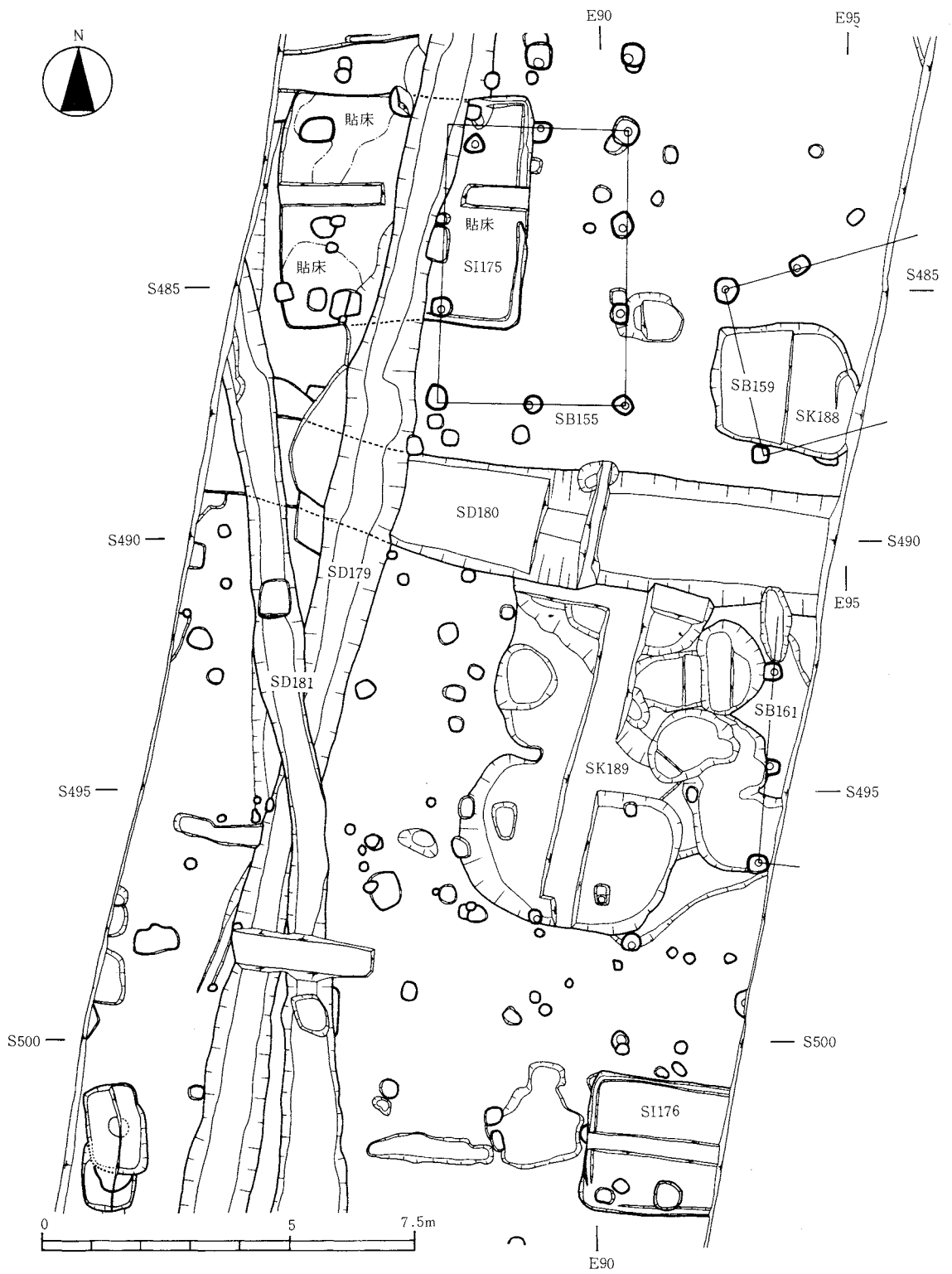
#### SB158建物跡（第6図）

調査区北半部で検出した南北2間以上、東西1間以上の掘立柱建物跡で、調査区の東端に位置しており大部分が東の調査区外に延びている。本建物跡はSB157建物跡、SI173竪穴住居跡、SK187土壇と重複しており、SK187より新しく、SI173、SB157より古い。柱穴は西側柱列と北側柱列で計4個検出しており、うち西側柱列の2個の柱穴で径0.20 mの円形の柱痕跡を確認している。柱間は、柱痕跡が判然としなかった柱穴ではその中央に柱位置を想定すると、西側柱列で南から1.69 m + 1.5 m、北側柱列は1.7 mとなる。建物の方向は西側柱列で測るとN19°Wである。柱穴は0.6 m × 0.7 mほどの長方形で、埋土は黒褐色土である。深さは断ち割り調査を行っていないため不明である。

遺物は柱穴埋土から土師器甕の胴部破片が1点、柱痕跡から土師器甕と須恵器甕の胴部破片がそれぞれ1点ずつ出土している。

#### SB155建物跡（第7図）

調査区中央部で検出した南北3間、東西2間の南北棟掘立柱建物跡である。本建物跡はSI175竪穴住居跡、SD179溝と重複しておりこれらより古い。また、本建物の北約1.3 mに位置するSB154建物跡とはほぼ同規模で、柱筋も一致している。柱穴はSD179に壊されている北西隅の柱穴を除く9個を検出しており、うち7個の柱穴で径0.15 m前後の円形の



第7図 小館地区遺構図(2)

柱痕跡を確認している。柱痕跡が判然としなかった柱穴ではその中央に柱位置を想定すると、建物の規模は桁行が東側柱列で5.45m、梁行が南側柱列で約3.8mとなり、柱間は桁行が東側柱列で南から1.85m+1.63m+1.97m、西側柱列で南から1.8m+1.8m+(1間分不明)、梁行が南妻で東から1.95m+1.9m、北妻で東から1.73m+(1間分不明)となる。ただし、東側柱列の柱痕跡はSB154建物跡と同様に一直線上に並ばない。建物の方向は、南北両妻の棟通り下の柱痕跡を結ぶ線で測るとほぼ真北に一致している。柱穴は、一辺が0.45m前後の不整形で、壁はほぼ垂直に掘られ、深さは約0.5mである。埋土は黒色土と褐色土を主体とし、4層に突き固められている。遺物は出土していない。

#### SB159建物跡(第7図)

調査区中央部で検出した南北2間、東西1間以上と推定される掘立柱建物跡である。柱穴は西側柱列と北側柱列で計3個検出したのみであるが、西側柱列の柱間が著しく長いものとなるため、これを2間と推定し、中央の柱穴はSK189土壌によって破壊されたものと考えた。北側柱列の2個の柱穴で径約0.16mの円形の柱痕跡を確認している。他の1個の柱穴ではその中央に柱位置を想定すると、柱間は北側柱列で1.49m、西側柱列で約3.4m(2間分)となる。建物の方向は北側柱列で測るとE13°Nである。柱穴は一辺が0.45m前後の不整形で、埋土は黒褐色土である。断ち割り調査を行っていないため深さは不明である。遺物は出土していない。

#### SB161建物跡(第7図)

調査区中央部で検出した南北2間以上の掘立柱建物跡で、調査区の東側に延びる建物の西側柱列かと思われる。本建物跡はSK189と重複しておりこれより古い。柱穴は3個検出しており、すべての柱穴で径0.14mの円形の柱痕跡を確認している。柱間は南から1.96m+1.90mである。方向はN4°Eである。柱穴は一辺約0.4mの不整形で、埋土はにぶい褐色土である。断ち割り調査を行っていないため、深さは不明である。遺物は出土していない。

#### SB160A・B建物跡(第9図)

調査区の南西部で検出した東西3間、南北2間と推定される東西棟掘立柱建物跡である。ほぼ同位置でA・B2時期の変遷がみられ、新しい方のBは総柱の建物跡であることから、古い方のAも同構造であった可能性がある。本建物跡はSD179・SD182・SD183溝と重複しており、これらより古い。このうちSD183は本建物跡の東から2番目の柱穴を完全に破壊している。

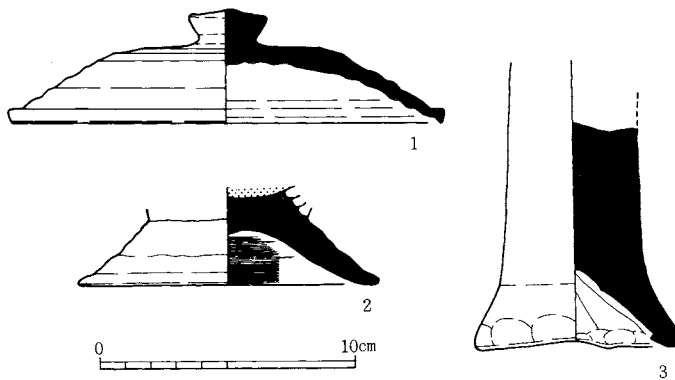
SB160Aの柱穴は8個検出しており、うち東妻の2個と西妻の1個の柱穴で径約0.3mの円形の柱痕跡と北東隅の柱穴で柱抜き取り穴を確認している。柱痕跡および柱穴の位置

関係から推定すると、規模は桁行が東西両妻棟通り下の柱痕跡で7.38m、梁行が東妻で約5.4mとなり、柱間は桁行が約2.5m等間、梁行が約2.7m等間とみられる。建物の方向は柱痕跡が残る東妻で測るとN3°Eである。柱穴は1.0m×1.2mほどの長方形で比較的大型である。壁は垂直に掘られ、深さは最も保存の良いもので約0.5mである。埋土は地山ブロックを多量に含む黒褐色土である。

SB160Bの柱穴は東から2間目の柱穴を除く9個を検出しており、うち南側柱列と東妻の5個の柱穴で径0.4m前後の円形の柱痕跡を確認している。建物内部にも柱穴が存在することから、総柱の建物であったとみられる。規模は桁行が南側柱列で8.25m、梁行が東妻で6.31m、柱間は桁行が南側柱列で東から5.70m(2間分)+2.55m、梁行が東妻で南から3.02m+3.29mであり、規模、柱間ともにSB160A建物跡よりも若干大きい。この建物の方向は東妻で測るとN2°Wとなり、SB160A建物跡に較べて北で5度西に偏している。柱穴は一辺が1.0m前後の方形ないし1.1m×1.7mほどの長方形などで、形や大きさにかなりのバラツキがみられる。壁はほぼ垂直に掘られ、深さは最も保存の良いもので約0.8mである。埋土は黒褐色土や明褐色土で3～4層に突き固められている。

遺物はSB160A柱穴埋土から少量の土器、SB160B柱穴埋土からは比較的多量の土器、土製支脚、平瓦が出土している。

SB160A柱穴埋土から出土した土器には土師器甕の胴部破片が2点、須恵器蓋が1点、須恵器片が1点ある。土師器甕のうち1点は胴部外面がハケ目調整されている。須恵器蓋(第8図1)は扁平な擬宝珠形つまみをもち、天井部が回転ヘラケズリされて平坦で、口縁端がほぼ直角に下方に折れ曲るものである。

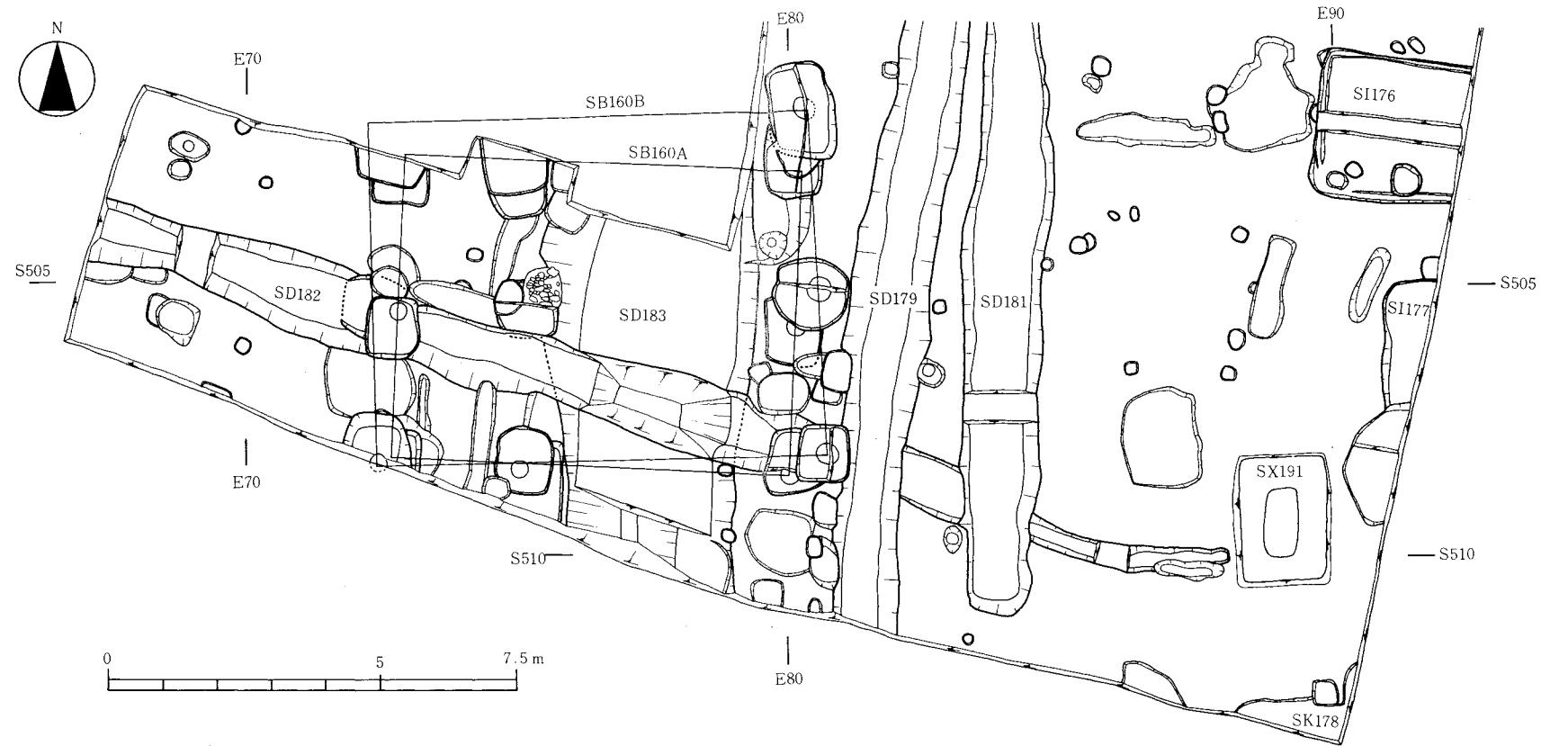


1	SB160A	柱穴埋土	須恵器	蓋
2	SB160B	柱穴埋土	土師器	高杯
3	SB160B	柱穴埋土	土製支脚	

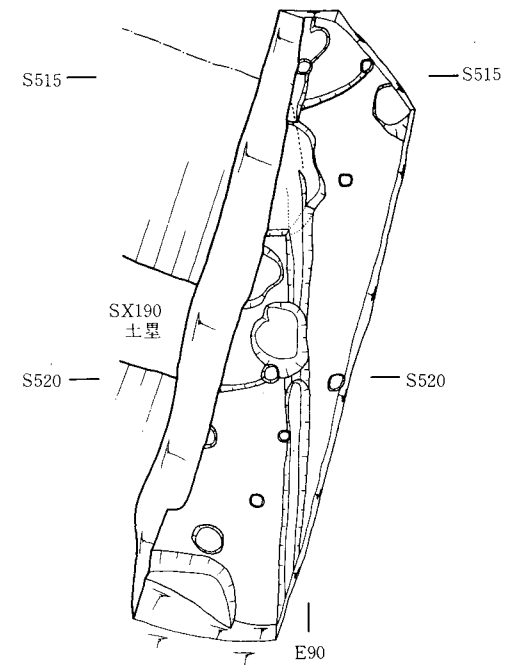
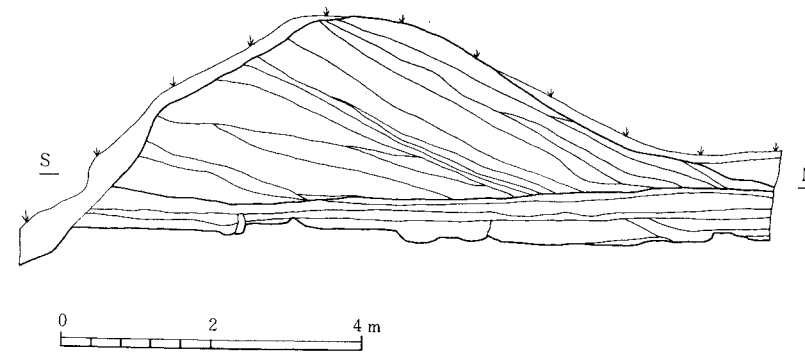
第8図 SB160建物跡出土遺物

SB160B柱穴埋土から出土した土器には土師器の杯5点、高杯1点、甕28点、須恵器の杯6点、高台杯2点、甕2点があるがいずれも小破片で全体の特徴は知り得ない。土師器杯の内訳は内黒のI類が4点、非内黒のII類が1点で、I類にはIA類とみられるものが3点含まれている。土師器の高杯(第8図2)は低い

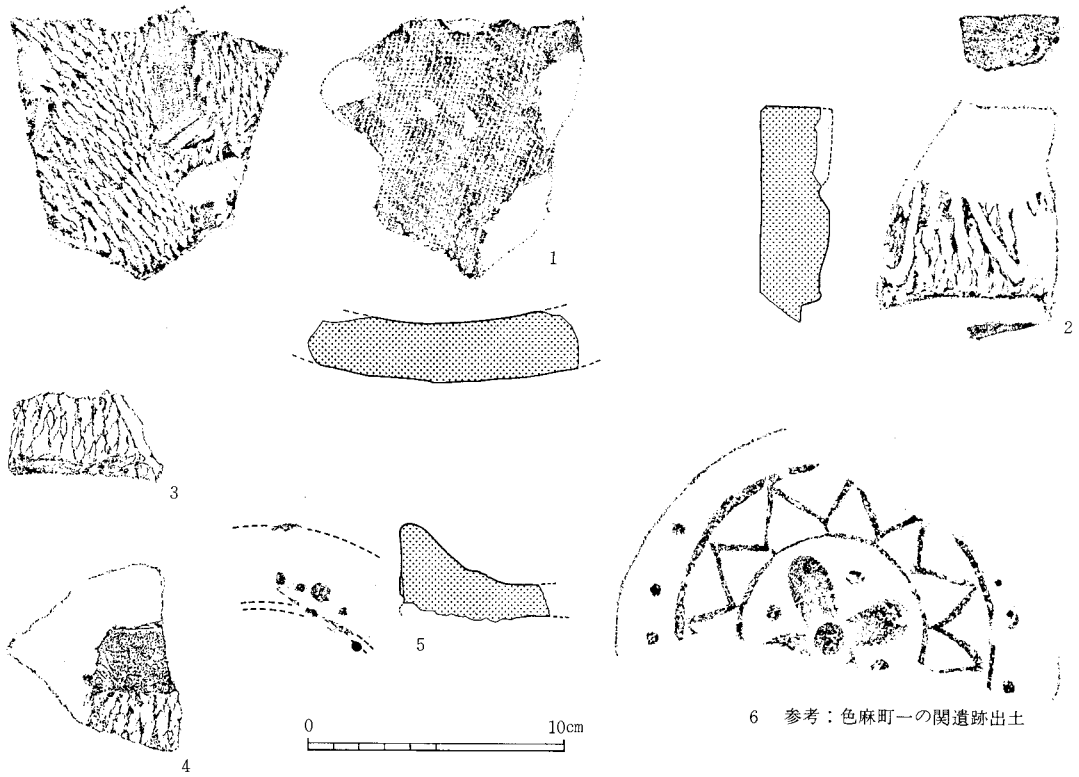




SX190土壘断面图



第9图 小館地区遺構图(3)



6 参考：色麻町一の関遺跡出土

1	SB160B	柱穴埋土	平瓦		4	SK 189	堆積土	軒平瓦	顎部
2	第2層		軒平瓦	顎部波文	5	第1層		軒丸瓦	珠文縁4弁花文
3	SK 189	埋土	軒平瓦	顎部波文					

第10図 小館地区出土瓦

円錐台形の脚部をもつもので、杯部内面はへらミガキ・黒色処理されている。土師器甕には胴部外面がハケ目調整されたものが8点みられる。須恵器杯には底部に手持ちへらケズリが施されたものが2点ある。

土製支脚は端部がややひろく径5cmほどの柱状のもの(第8図3)が1点出土している。

平瓦では凸面に縄叩き目、凹面に糸切り痕とそれに重複する布目がみられるもの(第10図1)が1点出土している。

### (3) 竪穴住居跡

竪穴住居跡は16軒検出している(SI162~177)。その分布をみると、調査区の北半部に集中しており、とくに北端部では多数の住居跡が複雑に重複している。これらの住居跡はすべて第3層上面で検出されており、第2層が分布する地域ではいずれもこれに覆われている。16軒の住居跡のうち、調査区内で全形を検出し精査を行ったのはSI168・170・173・175

住居跡	検出部分	重複関係	平面形状	規模	方位 (南北軸)	構造	遺物	備考
S1162	南東部	S1162 → S1163	方形	東西 2.4m以上 南北 1.7m以上	N19°W	不明	なし	未精査
S1163	南半部	S1162 → S1163 → { S1165 S1170 SD179 }	方形	東西 5.2m 南北 4.2m以上	N2°W	周溝：幅20cm、深さ10cm 貼床：検出部全面	土師器、須恵器	検出部分の西半のみ精査
S1164	南端部	S1164 → S1165	隅張りの隅丸 方形	東西 3.9m 南北 1.2m以上	N2°E	周溝：幅20cm、深さ10cm 貼床：検出部全面	土師器、須恵器	検出部分のみ精査
S1165	南半部	{ S1163 S1164 S1166 } → S1165	歪んだ方形	東西 4.7m 南北 1.9m以上	N8°E	周溝：貼床、柱穴を検出 (本文参照)	土師器、須恵器、鉄製品、石 斧 (本文参照)	検出部分のみ精査
S1166	南端部	S1166 → { S1165 S1167 }	不明	東西 2.0m以上 南北 1.3m以上	N11°W	不明	なし	未精査
S1167	南西部	{ S1166 } → S1167	方形	東西 1.4m以上 南北 4.9m以上	N2°E	不明	なし	未精査
S1168	全形	S1169 → S1168	隅丸方形	東西 3.2m 南北 3.1m	N11°W	カマド、貼床検出 (本文参照)	土師器、須恵器、鉄製品 (本文参照)	全面精査
S1169	北東部 以外	S1169 → { S1167 S1168 }	歪んだ隅丸 方形	東西 4.3m以上 南北 4.5m	N11°W	不明	なし	未精査
S1170	全形	SB151 } → S1170 → SD179 S1163 }	方形	東西 5.9m 南北 5.7m	N12°W	周溝、柱穴検出 (本文参照)	土師器、須恵器、鉄製品、円 面硯 (本文参照)	全面精査 カマド、煙道はSD179により破壊
S1171	南西部	SK184 → S1171	方形	東西 2.3m以上 南北 2.0m以上	N5°E	不明	なし	未精査
S1172	煙道部	なし	不明	不明	不明	煙道が2本平行して並び、カ マドの作り替えか	なし	煙穴部分は南調査区外に存在
S1173	全形	SB138 } → S1173 SK187 }	隅丸長方形	東西 3.4m 南北 2.4m	N12°E	カマド、周溝、貼床検出 (本文参照)	土師器、須恵器、瓦 (本文参照)	全面精査 煙道は削平
S1174	東半部	SB133 → S1174	不明	東西 3.1m以上 南北 5.2m以上	N6°W	周溝：南壁東端のみ検出 貼床：検出部全面	土師器、須恵器	検出部分のみ精査
S1175	全形	SB155 → S1175 → SD179	方形	東西 5.0m 南北 4.7m	N0°	カマド、周溝、貼床、柱穴検 出 (本文参照)	土師器、須恵器 (本文参照)	全面精査
S1176	東辺部 以外	なし	方形	東西 2.7m以上 南北 2.8m	N7°E	周溝、貼床検出 (本文参照)	土師器、須恵器、瓦 (本文参照)	検出部分のみ精査
S1177	西端部	なし	隅丸方形?	東西 0.9m以上 南北 2.3m以上	N1°W	貼床：検出部全面	なし	検出部分のみ精査

第2表 竪穴住居跡一覧

の4軒だけであり、他の住居跡は調査区外にまで延びているため、SI163~165・174・176・177の6軒についてのみ検出部分の精査を行い、他の6軒は平面を確認しただけで精査を行わずに埋め戻した。以下では全形を検出した4軒の住居跡と、比較的検出部分の多いSI165・176の2軒の住居跡についてのみ概要を述べ、これ以外の住居跡の検出部分、重複関係、平面形、規模、方位、構造などについては一括して第2表に示すことにする。

### SI165住居跡（第6図）

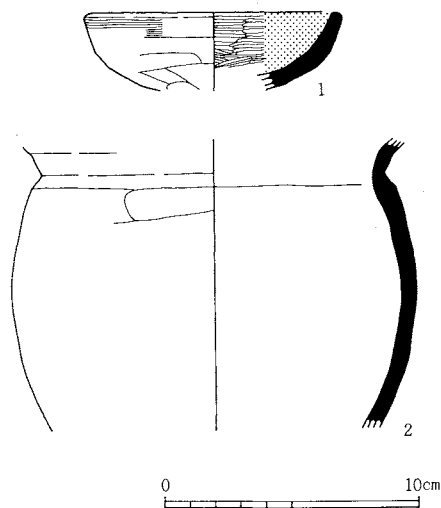
調査区北端で南半部分を検出した住居跡で、北半部分は調査区の北に延びている。本住居跡はSI163・164・166住居跡と重複しておりこれらより新しい。とくにSI164は南壁が本住居跡によって完全に削平され、周溝を残すのみとなっている。壁は急に立ち上がり、約0.3mの高さまで残存している。平面形は南辺に対して東辺と西辺が若干鋭角に取りついているので、台形に近い方形になるものとみられる。規模は東西が南辺で約4.7m、南北は1.9m以上となる。南北軸の方位は南辺で測るとN8°Eとなる。床面は南壁周辺は地山をそのまま床としているが、SI164と重複する部分にはSI164の床面上に明褐色土と黒褐色土を用いて厚さ0.1mほどの貼床をしている。周溝は南辺と東辺に認められ、幅0.15m~0.25m、深さ約0.1mで、断面はU字形である。周溝埋土は住居内堆積土とは区別される。柱穴は2個検出されており、位置関係から支柱穴と考えられた。いずれにも柱痕跡は確認されなかったが、柱穴の中心に柱位置を想定すると柱間は東西が約2.3mとなる。なお、今回の検出部分ではカマド、煙道、貯蔵穴などは確認されなかった。

住居跡内の堆積土は1層のみで、厚さ0.35mほどの地山の小粒子や木炭を多く含む黒褐色土である。

遺物は堆積土から土師器313点、須恵器19点、刀子かと思われる鉄製品1点、石斧1点が出土している(第11図、第3表)。土師器には杯、高杯、甕、甑がある。杯には内黒のI

層位		第 1 層	
土師器	杯	57点	I A 3 類(1)、I 類(47)、II 類(9)
	高杯	1点	
	甕	254点	
	甑	1点	無底式
須恵器	杯	7点	IV B 類(1)、IV C 類(2)
	蓋	3点	1点は短頸瓶の蓋か
	瓶	2点	
	甕	7点	
その他		刀子1点、石斧1点	

第3表 SI165住居跡出土遺物一覧



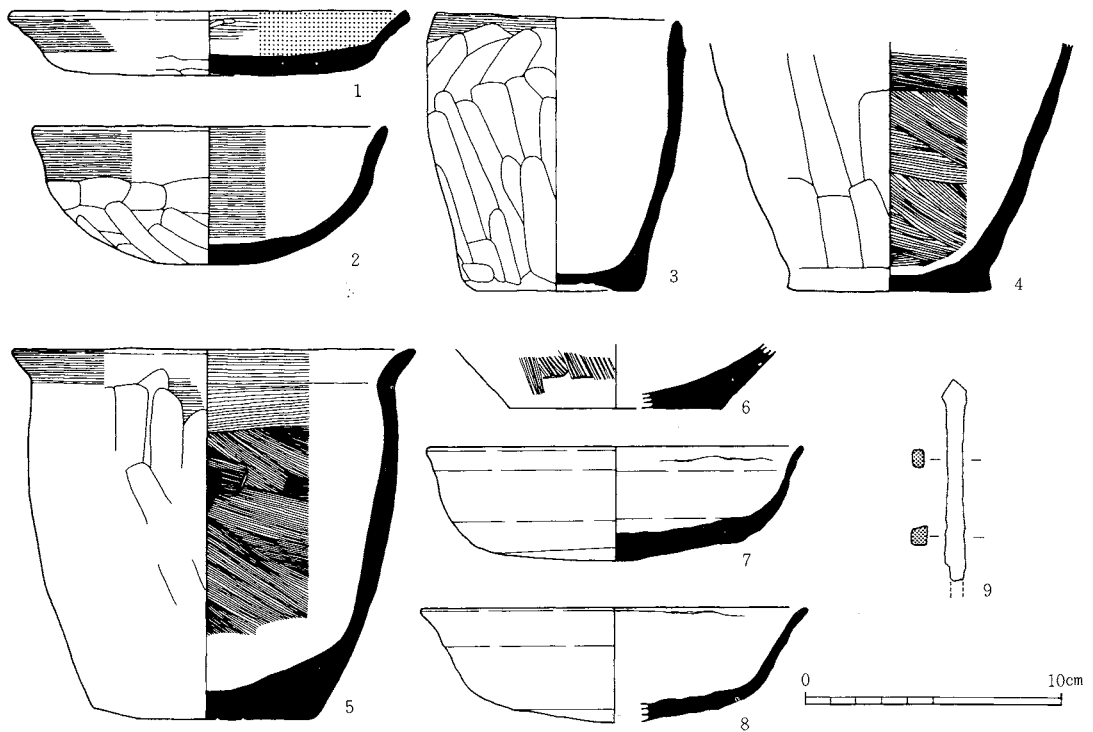
1	第1層	土師器	杯	I A 3 類
2	第1層	土師器	甕	胴部外面へラケズリ

第11図 SI165住居跡出土遺物

類が48点、非内黒のII類が9点みられ、前者が主体を占めている。I類には口径10.2cmのI A 3類の小型杯(1)がみられる。甕は大部分が小破片で、器形を推定し得るものは1点(2)のみである。須恵器には杯、蓋、瓶、甕があるが、いずれも小破片である。

S I 168住居跡 (第6図)

調査区北東隅で全形を検出した住居跡である。本住居跡はS I 169住居跡と重複しており、これより新しい。また北辺中央部は電柱支線の掘り方によって破壊されている。本住居跡は残存状況が悪く、壁は0.15mほどの高さを残すにすぎない。平面形は南辺と北辺の



1	第2層	土師器	杯	I A 3類	6	第2層	土師器	甕	底部木葉痕
2	床面	土師器	杯	II B類	7	床面	須恵器	杯	II A類、丸底気味
3	床面	土師器	鉢	底部木葉痕	8	床面	須恵器	杯	II A類、丸底気味
4	床面	土師器	甕	底部木葉痕	9	第1層	鉄製品	鏃	基部欠損
5	床面	土師器	甕	III類、底部木葉痕					

第12図 S I 168住居跡出土遺物

長さが異なるためやや歪んでいるが、おおむね隅丸方形で、規模は東西3.2m、南北3.1mである。南北軸の方位は南辺と北辺の中央を結ぶ線で測るとN11°Wとなる。床面は西半は地山をそのまま床としているが、東半にはS I169と重複する部分を中心に黄褐色土を用いて貼床をしている。カマドは北辺のやや東寄りに付設されているが、電柱支線の掘り方によって大部分が壊されており、焚き口部の焼け面と粘土で構築したカマド東袖の一部が残存するのみであった。周溝、柱穴、貯蔵穴などは検出されなかった。

住居跡内の堆積土は2層に分けられた。第1層は地山の小粒子や炭化物を多く含む褐色土、第2層は暗褐色土である。第1層は約0.2mの厚さで住居跡全面に分布し、第2層はきわめて薄く、小範囲にしか分布していない。

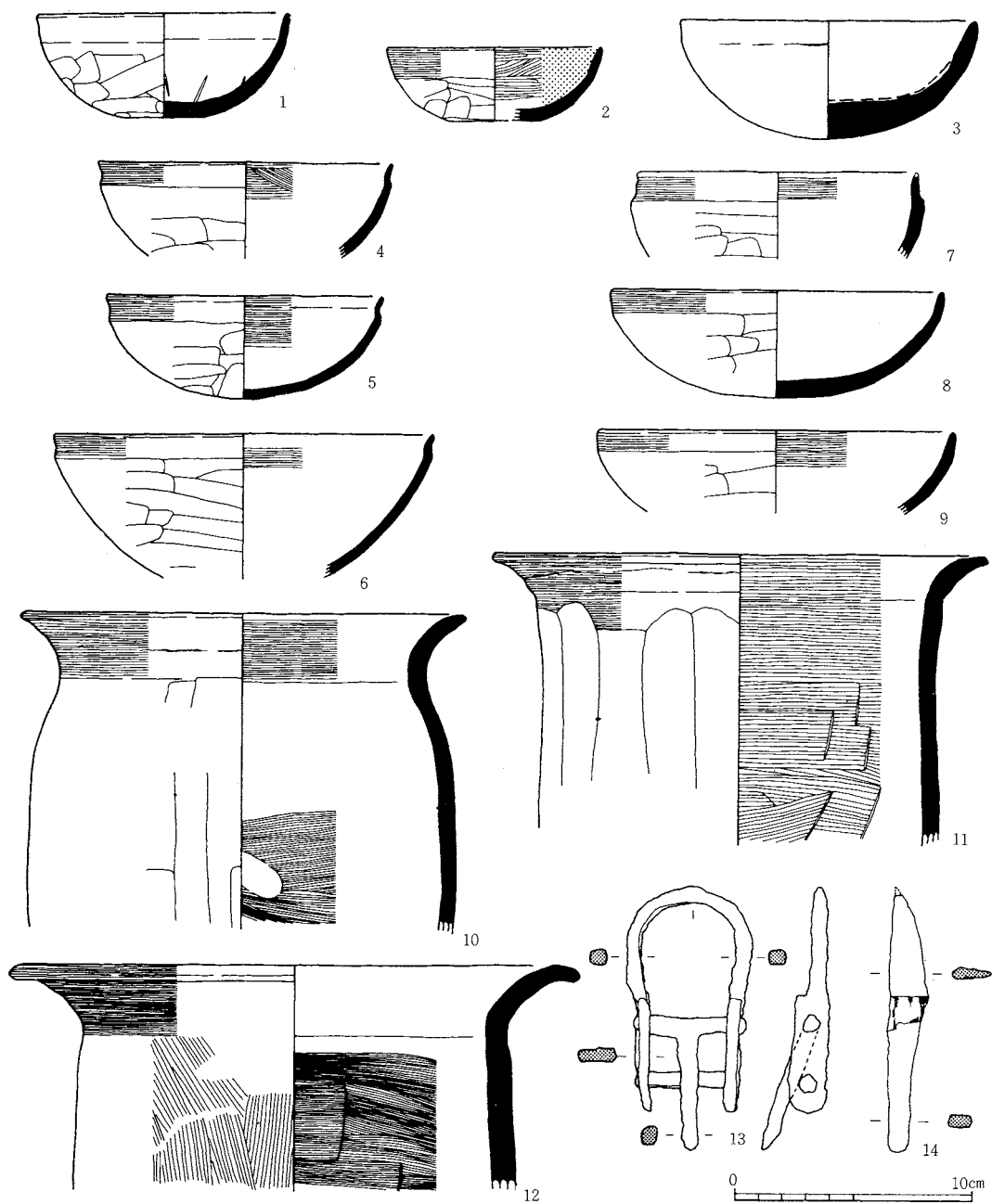
遺物はカマド東側の床面から復元可能な土器が数点出土したほか、堆積土第1層、第2層からも比較的多くの土器などが出土した(第12図・第4表)。床面から出土した土器には土師器杯・鉢・甕、須恵器杯・甕がある。土師器杯には内黒のI類が3点、非内黒のII B類が1点(2)みられる。土師器鉢(3)は、外面が口縁部にヨコナデ、胴部にヘラケズリが施され、内面がナデ調整された木葉底のものである。また土師器甕には口径15.9cm、器高14.4cmのIII類(小型甕)のものが1点(5)と、I類(長胴甕)とみられるもの(4)があり、いずれも底部には木葉痕がみられる。須恵器杯の2点(7・8)はII A類(ヘラ切り無調整)のもので、底部は丸底気味で口縁部は若干外反している。第2層からは土師器の杯と甕が出土している。杯には内黒のI類がI A 3類の1点(1)を含み7点みられる。甕には胴部外面がハケ目調整され、底部に木葉痕をもつもの(6)がある。第1層からは土師器の杯、高杯、鉢、甕および鉄鏝が出土している。杯は21点あり、すべて内黒のI類である。鉄鏝には基部を欠くもの(9)が1点ある。

#### S I170住居跡 (第6図)

調査区北半の中央部で全形を検出した住居跡である。本住居跡はSB151建物跡、S I163住居跡、SD179溝と重複しており、SB151、S I163より新しく、SD179より古い。このうち、SD179は本住居跡を南西隅から北辺中央部にかけて大きく破壊している。壁の残存状況はきわめて良好で、比較的急に立ち上がり、約0.4mの高さまで残存している。平面形は方形で、規模は東西5.9m、南北5.7mで比較的大型である。南北軸の方位はN12°Wである。床面は地山を叩き締めて床としており、貼床は認められなかった。カマドは検出され

層位		床面・細部		第2層		第1層	
遺物							
土師器	杯	4点	II B類(1) I類(3)	7点	IA 3類(1) I類(6)	21点	I類(2)
	高杯					1点	
	鉢	1点				1点	
須恵器	甕	16点	III類(1)	38点		45点	
	杯	2点	II A類(2)				
その他						鉄鏝	1点

第4表 S I168住居跡出土遺物一覧



1	第1層	須惠器	杯	IV B 2類	8	第4層	土師器	杯	II E類
2	第1層	土師器	杯	I A 3類	9	第1層	土師器	杯	II E類
3	第1層	土師器	杯	I類、内面剥落	10	第1層	土師器	甕	I B類
4	第1層	土師器	杯	II A類	11	床面	土師器	甕	I B類
5	第3層	土師器	杯	II A類	12	第4層	土師器	甕	I A類
6	第5層	土師器	杯	II A類	13	第5層	鉄製品	鉸 具	
7	第1層	土師器	杯	II F類	14	第1層	鉄製品	刀子	木質部一部残存

第13図 S1170住居跡出土遺物

層位 遺物		床面・細部		第 5 層		第 4 層		第 3 層		第 2 層		第 1 層	
土 師 器	杯			4点	II A 類(1) I 類(1) II 類(2)	1点	II E 類(1)	13点	II A 類(1) II 類(12)	43点	I 類(7) II 類(36)	46点	IA3類(1)、IIA類(1)、IIE類(1) IIF類(1)、I類(6)、II類(36)
	高杯	1点	脚部							1点			
	甕	2点	IB類(1)	12点		8点	IA類(1)	67点		52点		112点	IB類(1)
須 恵 器	杯							1点		1点	IV B 類か	2点	IV B 2 類(1)
	蓋											1点	
	甕	1点		1点				3点		4点		4点	
その他				鉄製鉸具 1点		不明鉄製品 1点		刀子 1点				刀子 1点、円面硯 1点	

第 5 表 S1170住居跡出土遺物一覧

なかったが、北壁周辺に若干の焼土や粘土のブロックが確認されていることから、北壁のやや東寄りに付設され、それがSD179溝によって壊されたものと推定される。周溝は全周しており、幅0.15m前後、深さ約0.1mで、断面は逆台形である。周溝の埋土は住居跡内堆積土とは区別される。支柱穴は住居跡のほぼ対角線上で3個検出した。南西隅の柱穴はSD179溝に壊されたものと考えられる。いずれにも柱痕跡は確認されなかったが、柱穴の中心に柱位置を想定すると、柱間は東西が2.8m、南北が2.5mとなる。また、北東隅の床面には径約0.8mの円形のピットがみられた。

住居跡内の堆積土は7層に分けられた。第1層は黒褐色土で、0.15～0.2mの厚さで住居跡中央部に分布する。第2層は地山の小粒子を多く含む黒褐色土で、0.05mほどの厚さでやはり住居跡中央部にのみ分布する。第3層は黒色土で、0.1mほどの厚さで住居跡のほぼ全面に分布し、中央部では床面に直接のっている。第4層は黒色土で、0.5m前後の厚さで住居跡の東壁付近にのみ部分的に分布する。第5層は灰黄褐色土で、約0.3mの厚さで東半部に分布し床面上に直接のっている。第6層は炭化物を含む黒褐色土で、0.04mほどの厚さで西壁付近の床面上に分布している。第7層は黒色土で、住居跡の壁際にのみ斜めに堆積している。

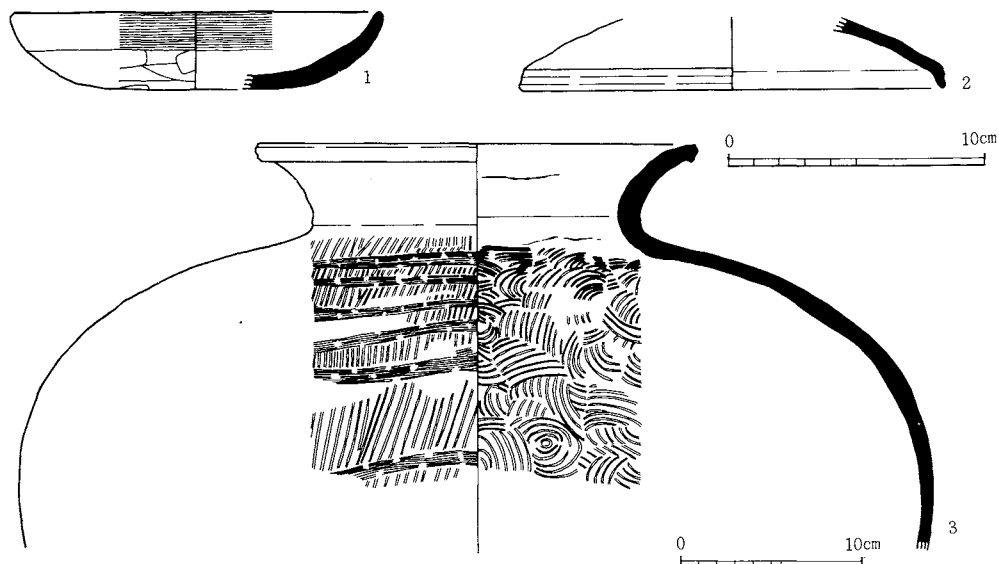
遺物は床面および堆積土第1～5層から土師器、須恵器、鉄製品などが出土している(第13図・第5表)。床面からは土師器の高杯・甕、須恵器の甕が出土している。土師器の甕にはIB類(長胴形で胴部外面がヘラケズリ調整)のものが1点(11)ある。第5層からは土師器の杯と甕、須恵器の甕、鉄製鉸具が出土している。土師器杯は内黒のI類が1点、非内黒のII類が3点で、後者にはII A類のものが1点(6)含まれている。鉄製鉸具は比較的大型のもので(13)、刺鉄は反転して基部に付着している。第4層からは土師器の杯と甕、用途不明の鉄製品が出土している。杯はIE類のもの(8)で、甕にはIA類(長胴形で胴部外面がハケ目調整)のもの(12)がみられる。第3層からは土師器杯・甕、須恵器杯・甕、刀子が出土している。土師器の杯13点はすべてII類で、II A類のものが1点(5)含まれて



いる。第2層からは土師器杯・高杯・甕、須恵器杯・甕が出土している。土師器杯の内訳はI類7点、II類36点で、II類が圧倒的に多い。第1層からは土師器杯・甕、須恵器杯・蓋・甕、刀子など比較的多量の遺物が出土している。土師器杯にはI類が7点、II類が39点あり、前者には口径9.2cmのIA3類の小形のもの(2)、後者にはIIA類(4)、IIE類(9)、IIF類(7)のものがそれぞれ1点ずつみられる。土師器甕にはIB類(長胴形で胴部外面がヘラケズリ調整)のもの(10)がある。須恵器杯は2点あり、うち1点はIVB2類(底部全面と体部下端が手持ちヘラケズリ調整)のもの(1)である。刀子は刃部がかなり禿ているもの(14)で、柄には木質部が付着している。これらの他に脚部に透かしをもつ円面硯の小破片が1点ある。

### S1173住居跡(第6図)

調査区北半の東寄りで全形を検出した住居跡である。本住居跡はSB158建物跡、SK187土壇と重複しており、これらより新しい。壁の残存状況は比較的良く、やや斜めに立ち上がり、約0.25mの高さまで残存している。平面形は東辺・西辺が中央部でやや脹らむ隅丸の長方形で、規模は東西3.4m、南北2.4mであり東西が1.0m長い。南北軸の方位はN12°Eである。床面は中央部では地山をそのまま床としているが、周縁部およびカマドの前方部には厚さ0.1mほどの貼床をしている。カマドは北壁のほぼ中央部に付設されているが、煙道部は削平のため残存していない。このカマドは貼床の上に灰白色の粘土で構築さ



1	第1層	土師器	杯	II E類	3	床面	須恵器	大甕	
2	第1層	須恵器	蓋	天井部欠損					

第14図 S1173住居跡出土遺物

れており、燃烧部は幅約0.4 m、奥行約0.6 mで、奥壁が住居跡の北壁付近で急に立ち上がる構造のものである。周溝は北西部と南東部で検出され、北東部と南西部では途切れている。幅は0.18m～0.36mで場所によって異なり、深さは0.1 m前後で、断面はU字形である。周溝埋土は住居跡堆積土とは区別される。柱穴は全く確認されなかった。また、北東隅の床面には南北0.6m、東西0.4mほどの楕円形のピットがみられた。

住居跡内の堆積土は3層に分けられた。第1層は灰黄褐色土で、0.2 m前後の厚さで住居跡の全面に分布する。第2層は焼土や木炭を含む灰黄褐色土で、0.03m～0.05mの厚さで住居跡南端の床面上に部分的に分布する。第3層は明黄褐色土で、約0.03mの厚さで住居跡中央部の床面上に薄く堆積している。

遺物は床面と堆積土第1・2層から土器や瓦が出土している(第14図・第6表)。床面からは土師器の杯・甕、須恵器の大甕が出土している。土師器杯には内黒のI類が2点みられる。須恵器の大甕(3)は胴張りのもので、胴部下半を欠くため器高は不明であるが胴部の最大径は50cmほどになる。第2層からは土師器と須恵器の甕の小破片が少量出土したのみである。第1層からは比較的多量の土師器杯・甕、須恵器高台杯・蓋・甕、平瓦、丸瓦が出土している。土師器杯には内黒のI類が9点、非内黒のII E類(1)が1点みられる。須恵器の蓋(2)は天井部を欠く資料である。平瓦と丸瓦はいずれも小破片で、平瓦は凸面縄叩き目、凹面布目のものである。

#### S1175住居跡(第7図)

調査区中央部の西寄りで全形を検出した住居跡である。本住居跡はSB155建物跡、SD179溝と重複しており、SB155より新しく、SD179より古い。SD179は本住居跡の中央部を南北に大きく破壊している。削平が著しいため壁の残存状況はきわめて悪く、最も保存の良い所でも0.1 mほどの高さしか残存していない。平面形は方形で、規模は東西5.0 m、南北4.7 mである。南北軸の方位はほぼ真北方向をとる。床面は中央部では地山を床としているが、周縁部には地山ブロックを含む黒色土で0.05mほどの厚さに貼床している。周溝は東半部でのみ検出されている。幅0.1 m～0.2 m、深さ約0.05mで、断面はU字形で

遺物		層位	床面・細部		第2層	第1層	
土師器	杯		2点	I類(2)		10点	II E類(1) I類(3)
	甕		8点		2点	86点	
須恵器	高台杯					1点	
	蓋					2点	
	甕		1点	大甕	3点	11点	
その他						平瓦1点、丸瓦1点	

第6表 S1173住居跡出土遺物一覧

遺物		層位	第1層	
土師器	杯		5点	IA 2類(1)、II C類(1)、I類(3)
	椀		1点	
	甕		66点	II類(1)
須恵器	杯		7点	II A類(1)、II B 1類(1)、IV C 2類(1)
	甕		2点	

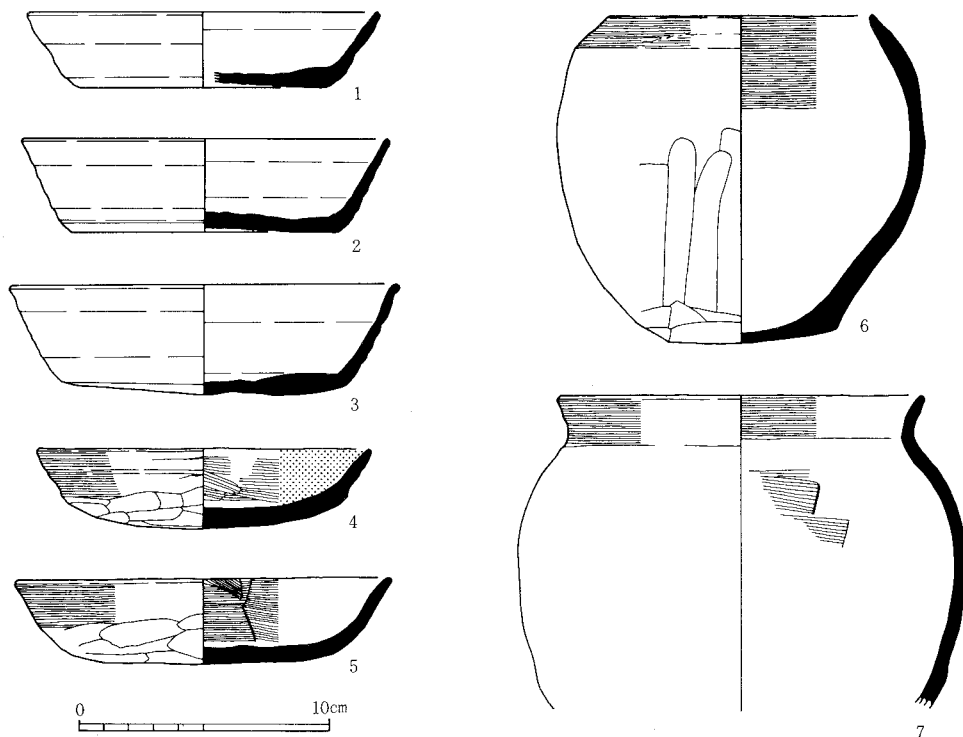
第7表 S1175住居跡出土遺物一覧

ろ。周溝埋土は住居内堆積土とは区別される。主柱穴は北東隅の住居跡対角線上の床面に検出されたのみである。北西隅の床面には東西0.7m、南北0.5mほどの楕円形のピミられた。なおカマドと煙道は全く検出されておらず、北壁ないし南壁に付設されものがSD179溝によって壊されたものとみられる。

跡内の堆積土は1層のみで、厚さ0.1mほどの焼土を若干含む暗褐色土である。

跡からは堆積土から土師器杯・碗・甕、須恵器杯・甕が出土している(第15図・第7表)。

土師器の杯には内黒のI類が4点、非内黒のII類が1点あり、前者にはIA2類のもの(4)、後者にはIIC類のもの(5)がみられる。土師器の碗(6)は底部から口縁部まで連続的に内湾するもので、内面と口縁部外面がヨコナデ調整、体部外面が縦方向にヘラケズリ調整されている。土師器の甕にはII類(胴張形)のもの(7)が1点みられる。須恵器の杯にはIIA類(1)、IIB1類(3)、IVC2類(2)が各1点あるが、いずれも口径は15cm前後で体部が直線的に外傾するものである。



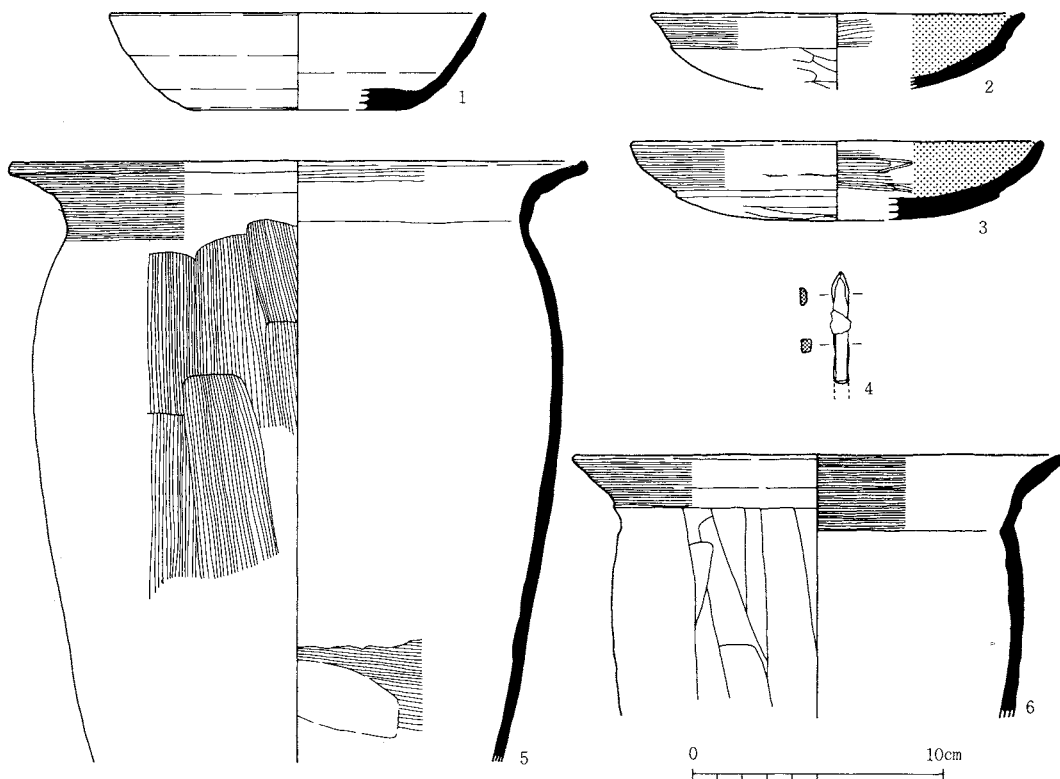
1	第1層	須恵器	杯	II A類	5	第1層	土師器	杯	II C類
2	第1層	須恵器	杯	IV C 2類	6	第1層	土師器	碗	口縁部外面・内面ナデ調整
3	第1層	須恵器	杯	II B 1類	7	第1層	土師器	甕	II類
4	第1層	土師器	杯	I A 2類					

第15図 S1175住居跡出土遺物

S1176住居跡（第7図）

調査区南半の東端で大部分を検出した住居跡で、東辺部は東の調査区外に延びている。主な遺構との重複はない。壁の残存状況は比較的良好で、最も保存の良い部分では約0.3mの高さまで残存する。平面形は南西隅が若干丸味をもつがおおむね方形と推定され、規模は南北2.8m、東西2.7m以上である。南北軸は西辺で測るとN7°Eとなる。床面には全面が地山ブロックを含む黒色土で貼床されている。周溝は各辺に認められるが、南西隅では一部途切れている。幅0.15m前後、深さ0.05m前後で、断面はV字形である。周溝の埋土は住居内堆積土とは区別される。南辺付近中央部の床面には径0.55mの円形のピットがみられた。今回の検出部分ではカマドや支柱穴は確認されなかった。

住居跡内の堆積土は3層に分けられた。第1層は灰黄褐色土で、0.15m～0.3mほどの厚さで住居跡全体に分布する。第2層は褐灰色土で、0.05mほどの厚さで住居跡中央部に部分的に分布する。第3層は黒褐色土で、0.1mほどの厚さで住居跡全体に分布し床面を



1	S1176	第1層	須恵器	杯		4	S1163	堆積土	鉄製品	鎌	
2	S1163	堆積土	土師器	杯	IA1類	5	S1176	第1層	土師器	甕	IA類
3	S1163	堆積土	土師器	杯	IA2類	6	S1171	堆積土	土師器	甕	IB類

第16図 S1176・S1163・S1171住居跡出土遺物

直接覆っている。

遺物は堆積土第1層から土師器甕(第16図5)、須恵器杯(1)、平瓦の小破片が出土しているのみである。このうち平瓦は凸面に格子叩き目、凹面に布目をもつものである。

その他の住居跡出土の遺物

その他の住居跡から出土したおもな遺物は第16図に示したとおりである。

(4) 土 塚

土塚は7基検出している(SK178・184~189)。これらの土塚は調査区の東半部に分布している。すべて第3層上面で検出されており、第2層が分布する地域ではいずれもこれに覆われている。各土塚の重複関係、平面形、規模、特徴、出土遺物などについては第8表に示したとおりである。これらの土塚を平面形と深さからみると、A：平面形が小判形を基調とし深さが0.5m~0.8mと深いもの、B：平面形が方形を基調とし深さが0.1mほどで浅いもの、C：平面形が不整形で深さが一定しないもの、の3種に分けられる。

AにはSK184、SK185、SK186、SK188の4基の土塚が含まれる(第6・7図)。これらのうち、SK185とSK188は壁が底面近くで若干膨らむ袋状をなし、周縁部に壁の崩落土とみられる地山のブロックを多量に含む層が堆積しているが、SK184にもやはり周縁部に同様の層が認められることから、これらの3つの土塚は本来は袋状をなしていたものと考えられる(第17図)。さらに、堆積土を検討すると、SK184、SK185、SK188では灰や木炭が土塚のほぼ全面に数枚の薄い層をなして堆積しており特徴的な堆積状況を呈している。これに対してSK186は壁が直線的に立ち上がり、壁の崩落土や灰・木炭の薄い層の堆積は認められず、前述の3土塚とは全く異なる(第17図)。したがってAの土塚は、A<sub>1</sub>：SK184・

土 塚	重 複 関 係	平面形	規 模	深 さ	特 徴	遺 物
SK184	SK184→S1171	小判形	東西 4.0m 南北 3.3m	約 0.8m	周縁部に壁の崩落土 灰や木炭が薄い層をなす	土師器、須恵器 丸瓦
SK185	なし	小判形	東西 3.6m 南北 2.8m	約 0.7m	袋状で周縁部に壁の崩落土 灰が薄い層をなす	土師器、須恵器 砥石
SK186	SK186→SB154	小判形	東西 2.3m 南北 2.8m	約 0.7m	焼土や木炭を含む	土師器、鉄製品
SK187	SK187→SB157・158、S1173	長方形	東西 3.4m 南北 4.7m	約 0.1m	竪穴住居状	土師器、金環
SK188	SB159→SK188	歪んだ 小判形	東西 3.0m以上 南北 2.7m	約 0.5m	袋状で周縁部に壁の崩落土 焼土や木炭を含む	須恵器、平瓦
SK189	SB161→SK189→SD180	不整形	東西 6.5m以上 南北 7.3m以上	0.3m~0.7m	底面の凹凸が著しい 多量の遺物を含む	土師器、須恵器 鉄鏃
SK178	SK178→SX190土塁	方形か	東西 2.8m以上 南北 2.8m	約 0.1m	竪穴住居状	なし

第8表 土 塚 一 覧

185・188と、A<sub>2</sub>: S K186の2つのグループとして把握できる。

BにはSK178とSK187の2基の土壇がある(第6・9図)。いずれも平面形が竪穴住居状をなし、住居跡の可能性もあるが、SK187にはカマド、周溝、柱穴などが全く認められないこと、SK178は部分的な検出であることから土壇としたものである。

CにはSK189土壇がある(第7図)。この土壇は底面の凹凸が著しく、複数の小土壇が密集した状況をなすが、明瞭な新旧関係が認められないことなどから同一の土壇と考えたものである。堆積土からは土師器、須恵器を中心に多量の遺物が出土した。

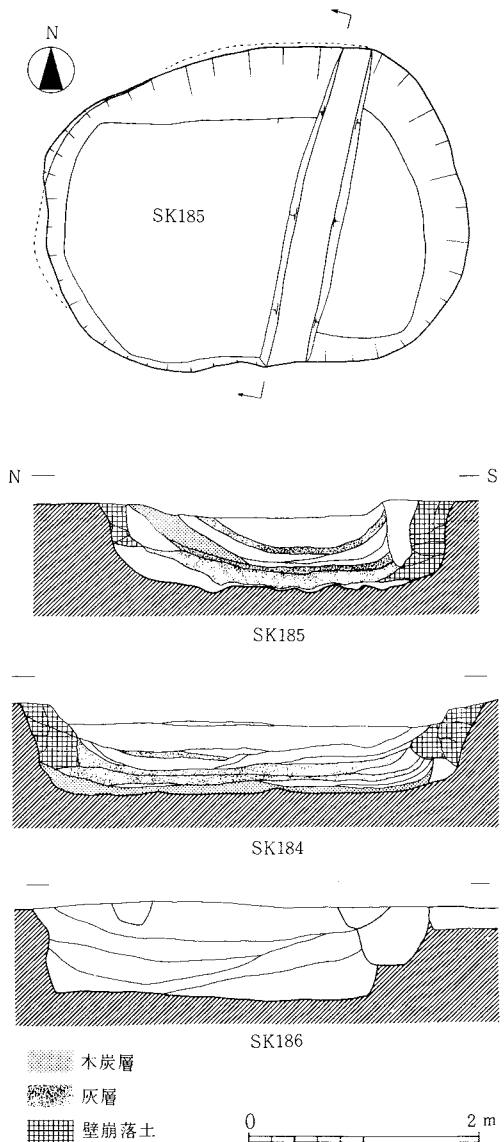
以下、各土壇の遺物について簡単にみてゆく。

#### SK184・185・188土壇出土の遺物

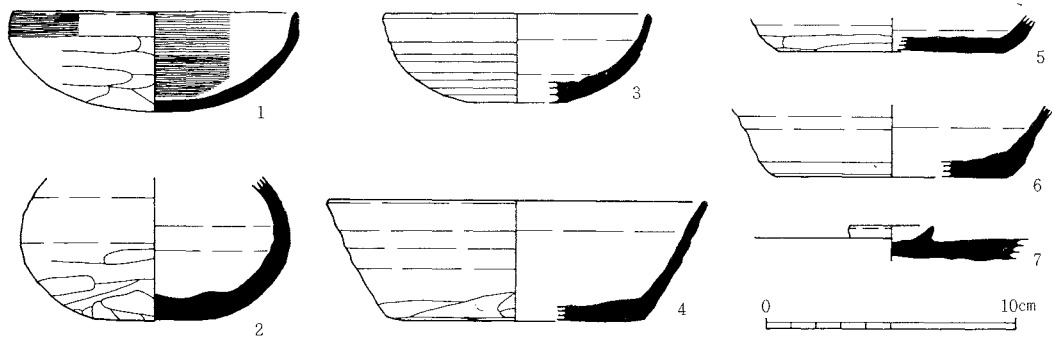
SK184土壇からは比較的少量の遺物が出土しており(第18図)、これらは上層の遺物と底面に近い下層の遺物に大別される。下層の遺物には土師器杯・鉢・甕、須恵器蓋・甕がある。土師器杯には非内黒のII類が3点みられ、これにはIID類のもの1点(1)が含まれている。上層の遺物には土師器杯・高杯・甕、須恵器杯・短頸瓶・甕のほか、丸瓦片が1点ある。土師器杯には内黒のI類が8点、非内黒のII類が1点みられる。須恵器短頸瓶(2)は体部が楕円形を呈する小型のもので、口縁部を欠く。

SK185土壇からはごく少量の土師器杯・甕、須恵器杯・甕が出土している(第18図)。須恵器杯には丸底気味のIVC2類(底部全面と体部下端が回転ヘラケズリ調整)が1点(3)みられる。

SK188土壇からは比較的少量の土師器杯・甕、須恵器杯・高台杯・蓋・甕、および平瓦1点が出土している(第18図)。土師器杯には内黒のI類が23点みられる。須恵器杯にはI



第17図 土壇断面図



1	SK184	堆積土下層	土師器	杯	II D類	5	SK188	堆積土	須恵器	杯	I B 2類
2	SK184	堆積土上層	須恵器	短頸瓶		6	SK188	堆積土	須恵器	杯	IV C 2類
3	SK185	堆積土	須恵器	杯	IV C 2類	7	SK188	堆積土	須恵器	蓋	リング状つまみ
4	SK188	堆積土	須恵器	杯	IV B 2類						

第18図 SK184、SK185、SK188土坑出土遺物

B 2類(静止糸切りで底部周縁と体部下端が手持ちへラケズリ調整)のもの1点(5)、IV B 2類(底部全面と体部下端が手持ちへラケズリ調整)のもの1点(4)、IV C 2類(底部全面と体部下端が回転へラケズリ調整)のものが2点(6)ある。須恵器蓋は平坦な天井部にリング状のつまみを持つもの(7)が1点出土している。また、平瓦は凸面に縄叩き目、凹面に布目がみられるものである。

#### SK186土坑出土の遺物

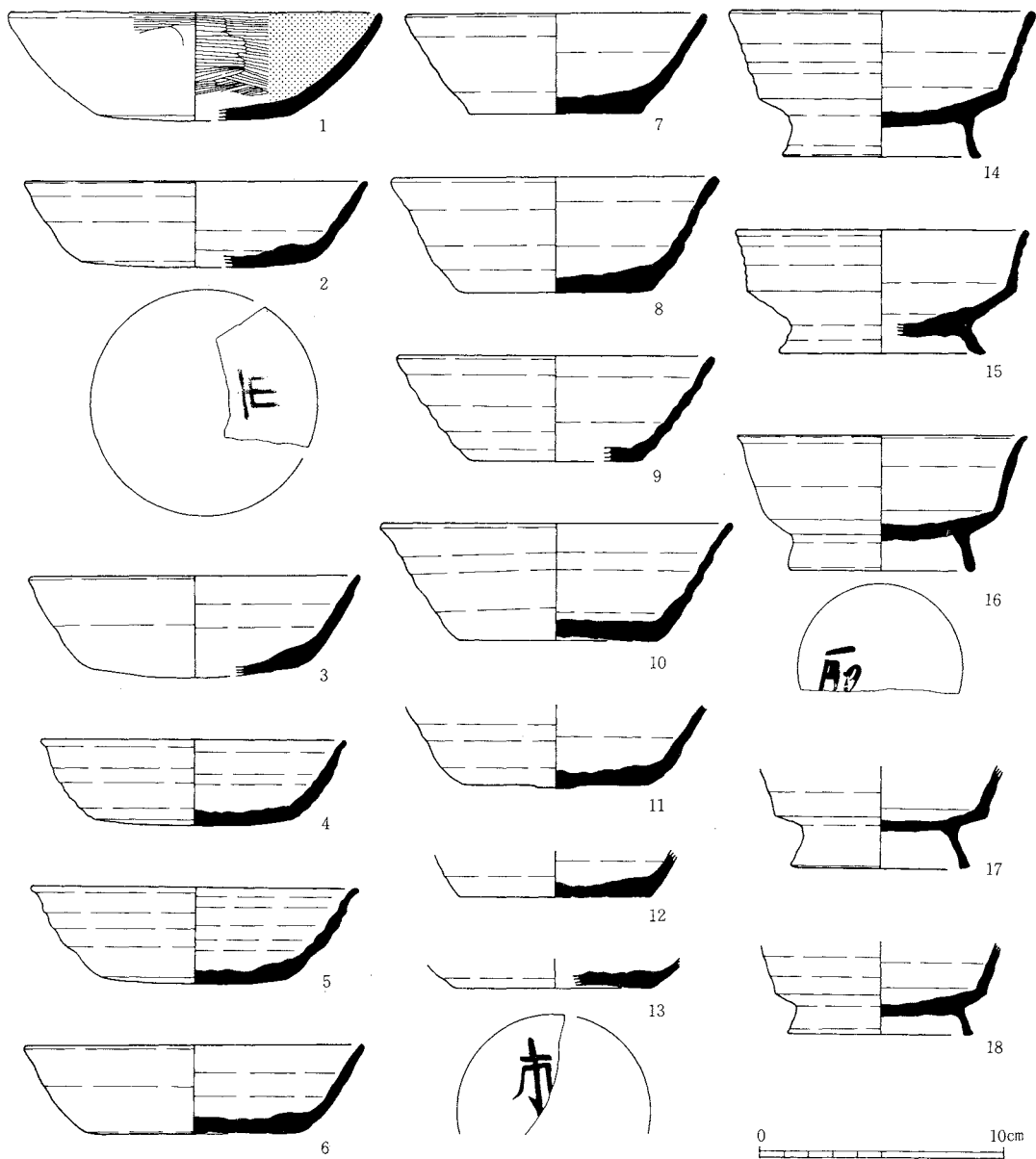
SK186土坑からは土師器杯・高杯・甕、須恵器甕の小破片と、鏝かともみられる鉄製品が1点出土している。土師器杯には内黒のI類が18点、非内黒のII類が1点みられる。

#### SK178・187土坑出土の遺物

SK178・187土坑からはごく少量の土師器、須恵器の小破片が出土したのみである。土器以外ではSK187土坑から金銅製の金環(図版16の1)が1点出土している。

#### SK189土坑出土の遺物(第19図)

SK189土坑からは多量の土師器、須恵器が出土しており、なかでも須恵器は量、器種ともに豊富である。土器以外には少量の軒平瓦、平瓦、丸瓦、砥石、鉄滓などがみられる。土師器には杯と甕がある。杯には内黒のI類と非内黒のII類がみられ、前者が圧倒的に多く、I B 2類のものが1点(1)含まれている。須恵器には杯、高台杯、双耳杯、甕がある。杯にはII A類(へら切り無調整)のものが10点(2~6・8~10・12・13)、III A類(糸切り無調整)のものが2点(7)、IV C 1類(底部全面が回転へラケズリ調整)のものが1点(11)みられ、II A類が圧倒的に多い。II A類のものには底部が丸底気味のもの(2~5)がある。2と13には底部外面に「市」とみられる墨書が認められる。高台杯は体部下半に直線的な稜をもち、



1	堆積土	土師器	杯	I B 2 類	10	堆積土	須恵器	杯	II A 類
2	堆積土	須恵器	杯	II A 類	11	堆積土	須恵器	杯	IV C 1 類
3	堆積土	須恵器	杯	II A 類	12	堆積土	須恵器	杯	II A 類
4	堆積土	須恵器	杯	II A 類	13	堆積土	須恵器	杯	II A 類
5	堆積土	須恵器	杯	II A 類	14	堆積土	須恵器	高台杯	
6	堆積土	須恵器	杯	II A 類	15	堆積土	須恵器	高台杯	
7	堆積土	須恵器	杯	III A 類	16	堆積土	須恵器	高台杯	墨書「厨」カ
8	堆積土	須恵器	杯	II A 類	17	堆積土	須恵器	高台杯	
9	堆積土	須恵器	杯	II A 類	18	堆積土	須恵器	高台杯	

第19図 SK189土坑出土遺物



底部には外側にふんばる高台をもつものが6点(14・16・17)出土している。高台の高さでは1.5cmほどの比較的高いもの(14・16・17)と、0.8cmほどの低いもの(15・18)がみられる。16は稜がやや不明瞭で、底部外面には「厨」とみられる墨書が認められる。軒平瓦には第2層出土の軒平瓦(第10図2)と同種とみられる軒平瓦の小破片が4点ある(第10図3・4)。平瓦は凸面が縄叩き目、凹面が布目のものである。

### (5) 溝・土 罎

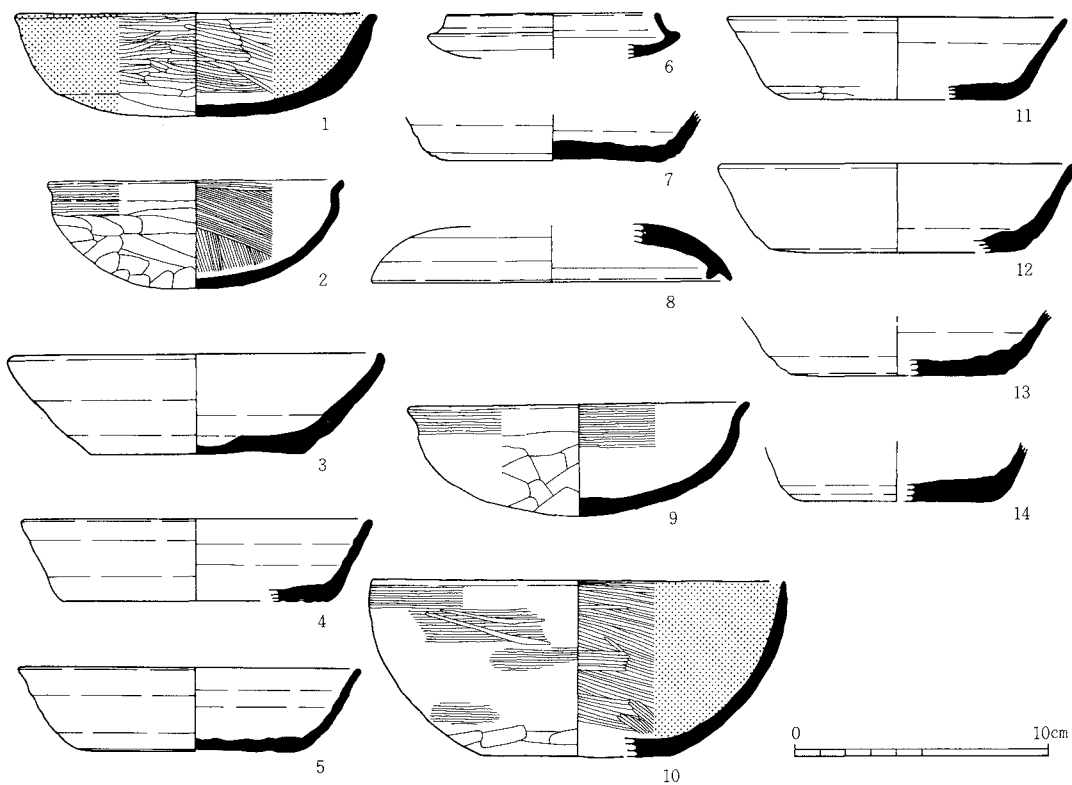
溝は5本検出している(SD179~183)。これらのうちSD179、SD181、SD183は南北溝、SD180とSD182は東西溝である。SD179とSD180は第2層上面で検出した。各溝は多数の掘立柱建物跡、竪穴住居跡、土壇などと重複しており、いずれもこれらを壊している。また、溝相互の重複関係を整理すると、SD183→SD182→SD179→SD181、SD180→SD179となり、SD183・SD182とSD180の新旧関係は不明である。各溝からは土師器(第20図1)、須恵器、瓦、鉄斧、鉄滓などが出土しているが、いずれも量は少なく、土器や瓦は小破片である。それぞれの溝の方向、規模などは第9表に示したとおりとなる。

SX190土罎は調査区の南端に位置し、東西に延びている。現在、土罎の高まりは50mほどの長さまで確認でき、その東端は国鉄陸羽東線の敷設時に切断されている。土罎の南側にはこれに沿って延びる空堀状の大溝がみられる。今回は土罎の断面観察により、その構造と年代を把握することに主眼を置き、大溝については調査を行わなかった。

土罎東端で断ち割り調査を行った結果(第9図)、SX190土罎は基底幅約8.8m、残存高約2.5mで、SK178土壇など古代の遺構を覆う堆積層第2層の上面に構築されていることが判明した。積土は灰黄色土、にぶい黄橙色土、黒褐色土などで17層に細分されるが、いずれも南側から北側に大きく傾斜している。したがって、この土罎は外側から内側に順次積み上げて構築されたものであることが知られる。各積土の厚さは0.05m~0.40mで一定していない。積土中からは須恵器や瓦の小破片が少量出土した。また、土罎の北裾には厚

溝	方 向	長 さ	上 端 幅	下 端 幅	深 さ	断 面 形	遺 物
SD179	南北(N12°E)	56m、さらに南北に延びる	約1.5m	約0.5m	約0.5m	ロート状	土師器、須恵器、瓦、鉄斧
SD180	東西(W8°N)	12.5m、さらに東西に延びる	約2.4m	約0.7m	約0.8m	逆台形	土師器、須恵器
SD181	南北(南:N0° 北:N8°W)	26m、さらに北に延びる	約1.1m	約0.4m	約0.8m	ロート状	瓦片
SD182	東西(W18°N)	17m、さらに西に延びる	約1.2m	約0.6m	約0.3m	逆台形	土師器、鉄滓
SD183	南北(N0°)	6m、さらに南北に延びる	約2.4m	約0.7m	約0.7m	V字状	なし

第9表 溝 一 覧



1	SD179	土師器	杯	I B 1 類	8	第 1 層	須恵器	蓋	かえりをもつ
2	溝	土師器	杯	II A 類	9	第 1 層	土師器	杯	II A 類
3	土壘下第 2 層	須恵器	杯	III A 類	10	第 1 層	土師器	杯	I B 2 類
4	第 2 層	須恵器	杯	IV C 1 類	11	第 1 層	須恵器	杯	I C 2 類
5	第 2 層	須恵器	杯	II A 類	12	第 1 層	須恵器	杯	IV B 2 類
6	第 2 層	須恵器	杯	有蓋杯身	13	第 1 層	須恵器	杯	IV C 1 類
7	第 2 層	須恵器	杯	I C 2 類	14	第 1 層	須恵器	杯	IV B 2 類

第20図 溝、第1・2層出土遺物

さ 1 m ほどの崩壊土が認められた。

(6) 第 1 層・第 2 層出土の遺物 (第 20 図)

第 2 層から出土した遺物には土師器、須恵器、円面硯、紡錘車、軒平瓦などがある。須恵器杯には、I C 2 類 (静止糸切りで底部周縁と体部下端が回転ヘラケズリ調整) のもの (7)、II A 類 (ヘラ切り無調整) のもの (5)、III A 類 (糸切り無調整) のもの (3)、IV C 1 類 (底部全面が回転ヘラケズリ調整) のもの (4) がみられるほか、口縁部が内傾し、蓋の受部をもつ丸底の杯 (6) もある。円面硯は硯部から脚部上半にかけての小破片である。紡錘車 (図版 16 の 4 左) は、須恵器甕の胴部破片を研磨した円板の中心に穴を穿ったものである。軒平瓦には瓦当部が無文で、顎部に波文が描かれたもの (第 10 図 2) がある。

第1層から出土した主な遺物には土師器杯I B 2類(10)、II A類(9)、かえりをもつ須恵器蓋(8)、須恵器杯I C 2類(11)、IV B 2類(12・14)、IV C 1類(13)、および脚部に4本1組の平行刻線文と方形の透かしをもつ円面硯(図版16の3右下)、土製紡錘車(図版16の4右)、軒丸瓦(第10図5)がある。軒丸瓦は瓦当部の小破片であるが周縁に珠文がめぐっており、参考として第10図6にあげた色麻町一の関遺跡出土の軒丸瓦と同範のものとみられる。

## 2. 内館地区

内館地区で検出した遺構には、柱列1、竪穴住居跡1、土壇2、溝10などがある(第21図)。これらの大部分は地山である黄褐色火山灰層上面で検出したが、調査区東部には厚さ0.3mほどの旧表土である黒褐色火山灰を主体とする層が分布しており、この部分ではこの層の上面で土壇や溝を検出した。以下主要な遺構について述べる。

### SA208柱列跡

調査区西部の地山面で検出した東西3間以上の柱列である。本柱列はSD202・203・204・205・207溝と重複しており、SD203より新しくSD204より古い。SD202・205・207とは直接の切り合いがなく新旧関係は不明である。4個の柱穴のうち東西両端の柱穴で径約0.2mの柱痕跡を確認している。それによると、3間分の長さは7.38mであり、柱間はおよそ2.5mと思われる。方向はE36°Nである。柱穴は一辺が0.7m～1.0mの不整形で、深さは約0.45mである。埋土は褐色土や地山ブロックを含む極暗褐色土などである。遺物は出土していない。

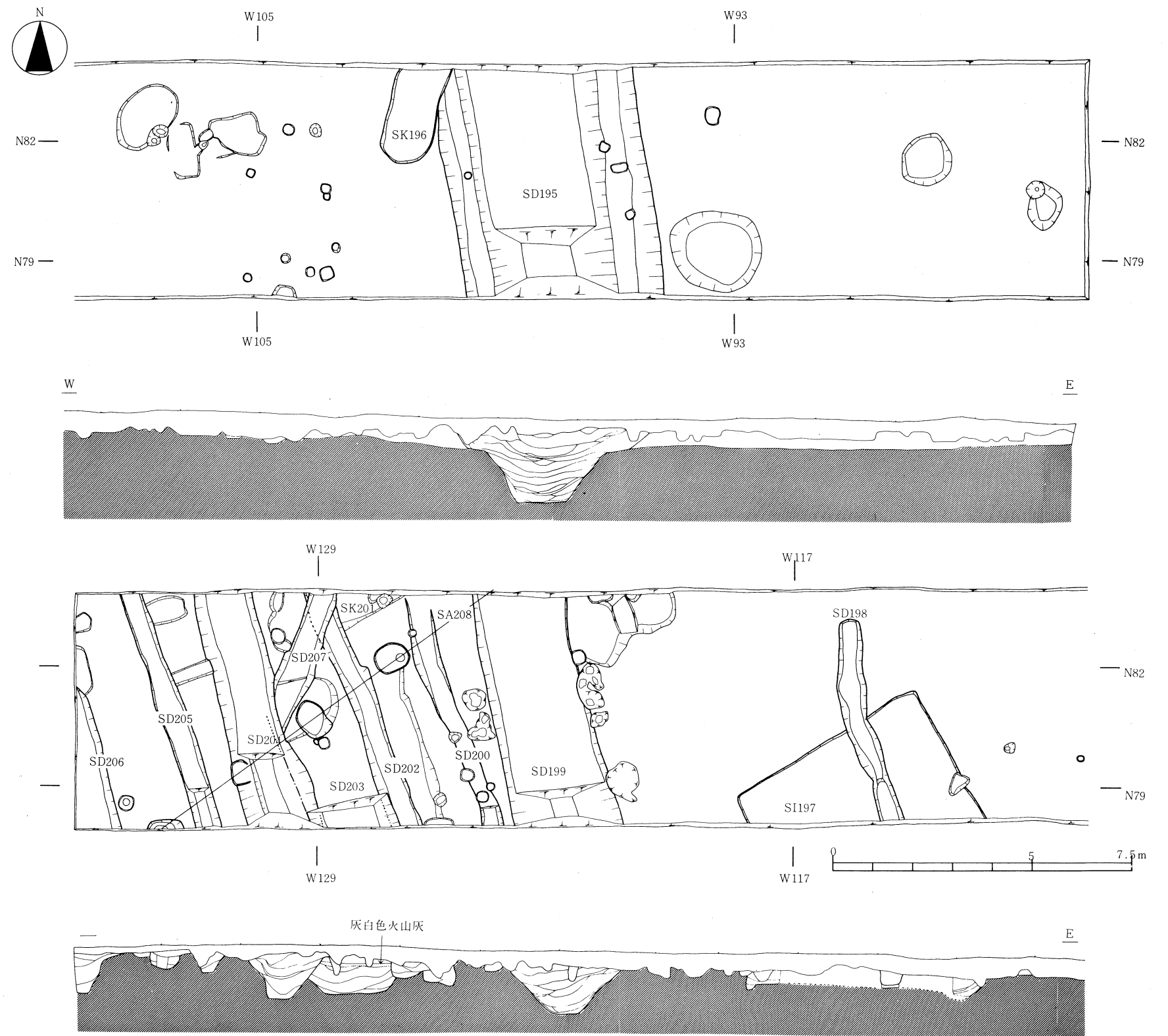
### SI197住居跡

調査区中央部の地山面で北半部を検出した住居跡である。本住居跡はSD198溝と重複しており、これより古い。

平面形は方形で、北辺の長さは約5.1mである。本住居跡は平面を確認しただけで精査を行っていないため、周溝、カマドなどの施設については不明であるが、部分的に検出した床面は地山を固く叩き締めたものである。住居内堆積土は暗褐色土や地山の粒子を多量に含む褐色土などからなる。床面直上の堆積土中には多量の炭化物が含まれていることから、本住居跡は火災によって廃絶したものと思われる。堆積土中より粘板岩製の砥石が出土している。

### SK196土壇

調査区東部の旧表土上で検出した土壇である。本土壇はSD195溝と重複しており、これ



第21图 内館地区検出遺構全体図

より新しい。長径2.4m以上、短径約1.2mの長楕円形で、深さは約0.7mである。堆積土は7層に細分され、上層の第1層、第2層(暗褐色土)には炭化米が多量に含まれている。第3層以下は地山ブロックを多量に含む暗褐色土などで、人為的に埋め戻された層である。遺物は出土していない。

#### SK201土塚

調査区西部の地山面で検出した土塚で、さらに調査区外へ延びている。本土塚はSD202・207溝と重複し、これらより古い。部分的な検出で精査を行っていないため、平面形や規模は不明である。遺物は出土していない。

#### SD195溝

調査区東部の旧表土上で検出した南北溝で、さらに調査区外へ延びている。SK196土塚と重複しており、これより古い。上端幅は約5.0m、下端幅は約1.3m、深さは約1.9mであり、断面形は下半部が逆台形を呈し、その上部の両側に幅0.4～0.6mほどのテラス状の平坦面をもちさらに斜めに立上がっている。堆積土は地山の小ブロックを多量に含む黒褐色土や暗褐色土、極暗褐色土などである。堆積土中より須恵器杯・甕、土師器甕、青磁皿(図版16-6)、中世陶器甕が出土している。

#### SD198溝

調査区中央部の地山面で検出した南北溝で、南側はさらに調査区外へ延びている。SI197住居跡と重複し、これより新しい。上端幅は約0.8m、下端幅は約0.5m、深さは約0.3mであり、断面形は逆台形を呈する。堆積土は灰白色火山灰を多量に含む暗褐色土である。遺物は出土していない。

#### SD199溝

調査区西部の地山上で検出した南北溝で、さらに調査区外へ延びている。上端幅は約2.6m、下端幅は約0.6m、深さは約1.3mであり、断面形は逆台形を呈する。堆積土は11層に細分され、上層(第1～8層)は地山の大きめのブロックを多量に含む黒褐色土や極暗褐色土などであり、人為的に埋め戻されている。下層(第9～11層)は暗褐色や明赤褐色の砂で、水性の自然堆積層である。堆積土上層より土師器甕、弥生土器、石臼(図版16-8)が出土している。

#### SD200・202・205溝

これらは方向、規模、埋土などで共通するので、一括して記述する。いずれも調査区西部の地山面で検出した南北溝で、さらに調査区外へ延びている。これらのうち、SD202はSK201土塚、SD203・207溝と重複し、SK201とSD203より新しく、SD207よりは古い。また、SD202・205はSA208柱列跡と重複しているが、直接の切り合いがなく新旧関係は不明

である。いずれも規模は上端幅が0.5m～0.7m、下端幅が約0.3m、深さが0.4m前後であり、断面形は逆台形を呈する。堆積土は地山の粒子が混じる暗褐色土である。SD202埋土中より須恵器甕が出土しているが、他からは遺物は出土していない。

#### SD203溝

調査区西部で検出した南北溝で、さらに調査区外へ延びている。SA208柱列跡、SD202・204・207溝と重複し、いずれよりも古い。上端幅は重複する溝のため正確には知り得ないが2.1m以上で、下端幅は約1.6m、深さ約1.0mであり、断面形は逆台形を呈するものと思われる。堆積土は下層が地山の粒子が混じる黒褐色土や暗褐色土などで、上層には厚さ約0.1mの灰白色火山灰の自然堆積層がみられる。堆積土中より須恵器甕、土師器甕が出土している。

#### SD207溝

調査区西部で検出した南北溝で、北側はさらに調査区外へ延びている。他のすべての溝の方向が北で20度前後西へ偏するのに対し、この溝の方向は北で20度ほど東へ偏している。SA208柱列跡、SK201土坑、SD202・203・204溝と重複し、SK201、SD202・203よりも新しくSD204よりは古い。SA208とは直接の切り合いがなく新旧関係は不明である。上端幅は約0.9mであるが底面まで掘り下げていないため下端幅、深さ、断面形などは不明である。遺物は出土していない。

#### SD204溝

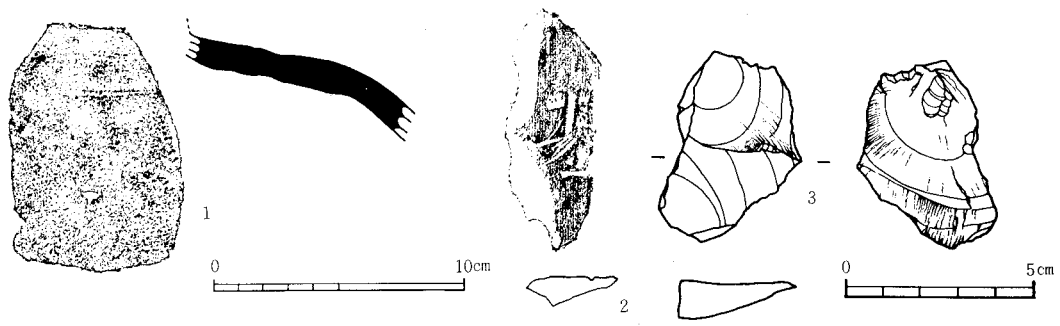
調査区西部の地山面で検出した南北溝で、さらに調査区外へ延びている。SA208柱列跡、SD203・207と重複し、これらより新しい。上端幅は約1.5m、下端幅は約0.5m、深さは約1.2mであり、断面形はV字状を呈する。堆積土は地山ブロックを含む暗褐色土や極暗褐色土などである。堆積土中より格子叩き目の平瓦と石臼が出土している。

#### SD206溝

調査区西端の地山面で検出した南北溝で、さらに調査区外へ延びている。部分的な検出のため、上・下端幅は不明である。深さは約1.0mで、断面形はロート状を呈すると思われる。堆積土は地山ブロックを含む黒褐色土や暗褐色土などである。遺物は出土していない。

#### 第1層など出土の遺物（第22図）

第1層からは瓦や土器などが少量出土している。いずれも小破片で図示できるものは少ない。瓦には平瓦と丸瓦があり、平瓦には花文、格子、繩の叩き目がみられる。土器には須恵器杯・高台杯・甕、土師器杯・甕、中世陶器甕がある。中世陶器甕(1)は肩部の破片で常滑窯の製品と思われる。他に弥生土器と思われる土器片が出土している。土製品には



1	第1層	中世陶器甕	肩部	3	地山火山灰層	頁岩剥片	旧石器時代
2	第1層	板碑破片	梵字か				

第22図 内館地区出土遺物

轆の羽口と柑塙がある。石製品には板碑、石臼、砥石がある。板碑(2)の石材は粘板岩であり、表面には梵字かとみられる文字が刻まれているが判読できない。

他に地山の黄褐色火山灰層より旧石器時代の頁岩の剥片(3)が出土している。

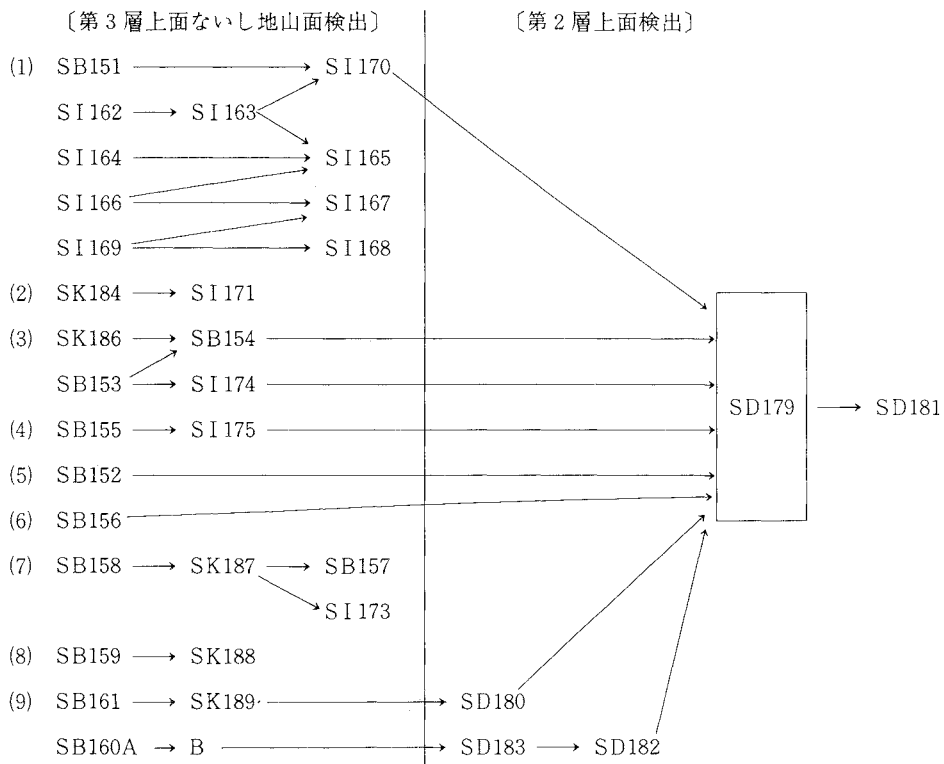
# VII. 考 察

## 1. 小館地区

今回の調査で検出したおもな遺構は掘立柱建物跡11、竪穴住居跡15、土壇7、溝5、土塁1などである。以下、これらについて遺構の変遷、年代などを検討し、本地区の性格を述べる。

### (1) 遺構期の設定

小館地区を検出した遺構を重複関係により整理して示すと次のようになる。



重複関係なし：SK178、SK185、SI172、SI176、SI177、SX190

以上のうち、SD180、SD183以降の5本の溝とSX190土塁は第2層上面で検出されたものであり、他はすべて旧表土である第3層上面ないし地山面で検出されている。以下検出面ごとに検討する。

(i)第3層上面および地山面で検出した遺構群

掘立柱建物跡



まず建物跡の柱穴について検討する。柱穴の形状には不整形のもの、長方形のもの、円形のものなどがみられるが、同一の建物跡で異なる形状の柱穴が混在している場合もみられさまざまである。柱穴の規模をみると、A：0.3～0.6mほどの小規模なものと、B：1.0～1.7mほどの大規模なものに分けられる。形状との関係ではAには不整形、長方形、円形を基調とするものが含まれ、Bには長方形を基調とするものがみられる。

つぎに建物跡の南北軸の方向についてみると、I：北で西に偏するもの、II：ほぼ真北方向のもの、III：北で東に偏するものの3者に大別できる。Iは13°～19°西偏しており、IIは2°西偏するものから4°東偏するものまでがみられ、IIIは16°東偏している。

以上述べた柱穴の規模と建物跡の南北軸の方向をもとにすると、建物跡は次の4つのグループとして把握することができる。

- ① A I の特徴をもつ建物跡……SB151・158・159
- ② A II の特徴をもつ建物跡……SB152・154・155・156・157・161
- ③ A III の特徴をもつ建物跡……SB153
- ④ B II の特徴をもつ建物跡……SB160A・B

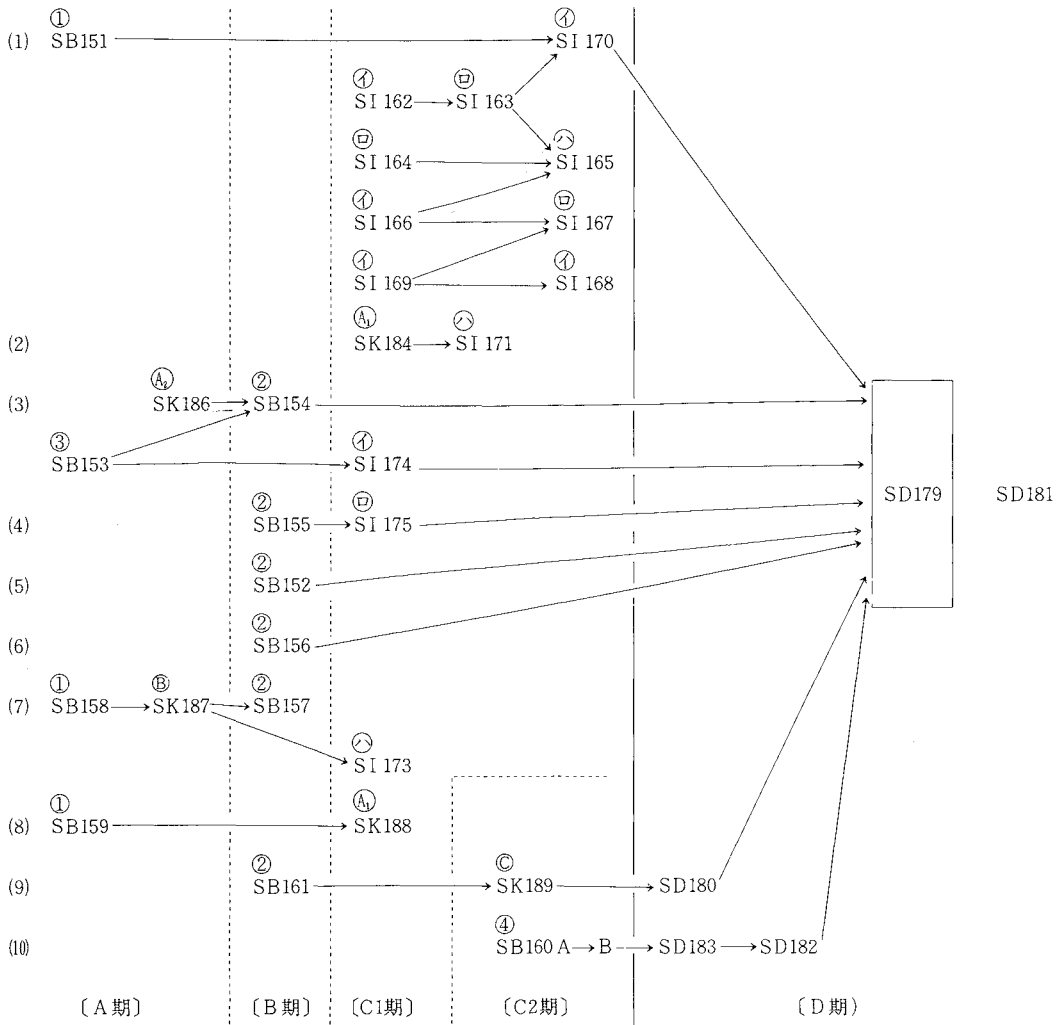
これらについて前述の重複状況にもとづいて新旧関係を検討してみると、(3)で③→②、(7)で①→②の重複がみられ、①・③→②といった変遷が知られるが、①と③の新旧関係は不明である。後述する他の遺構との関係を見ると、(1)・(3)・(4)・(7)・(8)・(9)の重複関係から、①は①・②住居跡、④・⑤土壇より古い、②は④・⑤土壇より新しく⑥住居跡・⑦土壇より古い、③は①住居跡より古い、ことが知られ、重複関係で①、③より古い遺構は全くみられない。

#### 竪穴住居跡

竪穴住居跡は全形を検出したものが少ないため規模、構造、カマドの付設位置などについて比較検討することは困難である。そこで平面形のみ検出した住居跡でも検討可能な南北軸の方向をもとにすると、竪穴住居跡はおおむね次の3つのグループとして把握することができる。

- ① 南北軸が北で西に偏する住居跡……S I162・166・168・169・170・174
- ② 南北軸がほぼ真北方向の住居跡……S I163・164・167・175・177
- ③ 南北軸が北で東に偏する住居跡……S I165・171・173・176

①では11°～12°西偏するものが大部分を占めており、②には2°西偏するものから2°東偏するものまで、③には5°～12°東偏するものがみられる。これらについて重複状況をもとに新旧関係を検討すると、(1)で①→②→①・③、②→③、①→②・③、①→①・②の重複がみられ、おおむね①→②→③といった関係が認められるが、①→②→①の重複もみられる



第10表 遺構の分類とその重複状況

ことから、南北軸の方向にもとづいたグループがそのまま時間差を示すとは必ずしも言えない状況もみられる。掘立柱建物跡および後述する土壇との関係を見ると、(1)、(2)、(3)、(4)、(7)、の重複関係から、㊦は㊠・㊢建物跡、㊧は㊡建物跡、㊨は㊣・㊤土壇よりもそれぞれ新しいことが知られ、重複関係で㊦～㊨よりも新しい遺構は全くみられない。

土壇

土壇については前章ですでに形状と深さなどを基準として以下の4グループに分けている。

㊣：平面形が小判形を基調とし、深さが0.5～0.8mと深く、壁が袋状をなし、灰・木炭

の薄い層の堆積がみられるもの……SK184・185・188

㊸：平面形が小判形を基調とし、深さが0.5～0.8mと深く、壁が直線的で灰・木炭の薄い層がみられないもの……SK186

㊹：平面形が方形を基調とし、深さが0.1mほどの浅いもの……SK178・187

㊺：平面形が不整形で、深さが一定しないもの……SK189

各グループの新旧関係は、土壇同士の重複がみられないため不明である。他の遺構との関係をみると、(2)・(3)・(7)・(8)・(9)の重複関係から、㊸は①建物跡より新しく㊶住居跡より古い、㊹は②建物跡より古い、㊺は①建物跡より新しく②建物跡・㊶住居跡より古い、㊻は②建物跡より新しい、ことが知られる。

以上検討した掘立柱建物跡、竪穴住居跡、土壇の新旧関係をまとめると第10表のようになる。この表により、南北軸が真北にほぼ一致する②建物跡を基準にして各遺構群を再構成すると、②建物跡よりも古い①・③建物跡・㊸・㊹土壇と、②建物跡より新しい㊶～㊻住居跡・㊺土壇に大別することができる。したがって、小館地区の第3層上面および地山面で検出した遺構については次のA～Cの遺構期を設定することが可能である。

〔A期〕 ①建物跡……SB151・158・159

③建物跡……SB153

㊸土壇……SK186

㊹土壇……SK178・187

〔B期〕 ②建物跡……SB152・154・155・156・157・161

〔C期〕 ㊶住居跡……SI162・166・168・169・170・174

㊷住居跡……SI163・164・167・175・177

㊸住居跡……SI165・171・173・176

㊺土壇……SK189

その他……SI172

A期には①建物跡と③建物跡が含まれているが、両者は南北軸の方向が全く異なる建物跡であることから時期を異にする可能性が強いが、その新旧関係は把握できていない。またこの時期の遺構には①建物跡→㊹土壇という重複もみられることから、A期はある程度の時間幅をもっていただけのものとして把握することが妥当と考えられる。

B期の②建物跡についてみると、SB154とSB157は新旧関係は不明であるが、位置的に重複しており、同時には存在し得ないことから、やはり建て替えの時間幅を考慮する必要がある。

C期の竪穴住居跡については㊶～㊸を一括して同時期としたが、前述したように南北軸

によって分類したグループが必ずしも同時期とは言えない状況がみられることや、B期の建物跡との新旧関係を把握できたものが少ないことなどから、これらの中にはC期よりも古いものが含まれている可能性もある。重複状況をみると、調査区北端部では近接しているものも含めると最大で4時期までの変遷が推定でき、竪穴住居は比較的長期間にわたって存在していたものと考えられる。

なお、①建物跡より新しく②住居跡よりは古い③土壇、および他の遺構と重複関係をもたない④建物跡がA～Cのいずれの時期に属するかは決め得なかった。これらについては年代の検討をまって遺構期を推定したい。

#### (ii)第2層上面検出の遺構群

第2層上面で検出された遺構には溝と土塁がある。溝には、SD183→SD182→SD179→SD181、SD180→SD179という新旧関係が認められるが、これらはSX190土塁と共に中世大崎氏の居城であった名生城に関わる遺構とみられ、城内の区画溝と考えられる。遺構期としてはこれらをD期とする。

〔D期〕 土塁……SX190

溝……SD179・180・181・182・183

### (2) 遺構期の年代

A期の建物跡や土壇からは少量の土師器、須恵器の小破片が出土している。このうち④のSK186土壇には土師器杯のI類が18点、II類が1点みられる。I類はいずれも内黒で口縁部外面がヨコナデ調整された栗罎式と考えられるものである。

B期の建物跡ではSB154とSB156の柱穴からごく少量の土師器甕の小破片が出土したのみで、遺物により年代を推定することは困難である。

C期の竪穴住居跡および③のSK189土壇からは多量の土器が出土している。これらのうち、まず全面を精査し比較的多量の土器を出土したSI168、170、175住居跡について検討してみたい。

SI168住居跡からはカマド東側の床面から土師器杯・鉢・甕、須恵器杯・甕が比較的まとまって出土している。土師器杯には内黒のI類が3点、非内黒のII B類が1点あり、I類はすべて栗罎式とみられるものである。また、土師器鉢や甕では底部に木葉痕をもつものが多い。須恵器にはII A類とした丸底気味のへら切り無調整の杯が2点みられ、いずれも器形や法量は色麻町日の出山窯跡(註1)や田尻町木戸窯跡(註2)出土の杯にきわめて類似している。また、堆積土第2層からは清水町観音沢遺跡出土の杯(註3)に近似した特徴をもつ栗罎式の土師器杯I A 3類が出土している。

SI170住居跡では床面出土の土器は少ないが、堆積土からは比較的多くの土器が出土しており、本住居跡の埋没年代を知る手がかりを得ることができる。床面出土の土器で特徴のわかるものは、土師器甕I B類とした胴部外面が縦方向にヘラケズリされた長胴甕1点のみである。堆積土出土のものには土師器杯I A3類(1点)、II A類(3点)、II E類(2点)、II F類(1点)がみられ、量的に内黒のI類よりも非内黒のII類が多い。I類はすべて栗圀式とみられるものである。また、土師器甕には胴部外面がハケ目調整された長胴甕(IA類)や胴部外面がヘラケズリされた長胴甕(I B類)がみられる。須恵器杯には底部全面と体部下端に手持ちヘラケズリを施したものが1点ある。

SI175住居跡からは床面直上の薄い堆積土中から比較的多量の土器が出土しており、これらは本住居跡廃絶直後の年代を示すものと考えられる。土師器杯には内黒のI類が4点、非内黒のII C類が1点ある。I類はすべて栗圀式とみられ、器形がわかるI A類のものは観音沢遺跡出土のものに特徴が近似している。須恵器杯にはII A類としたヘラ切り無調整のもの、II B1類としたヘラ切りで底部周縁に手持ちヘラケズリを施したもの、IV C2類とした底部全面と体部下端に回転ヘラケズリを施したもの、の3点があり、これらの特徴および器形や法量は日の出山窯跡や木戸窯跡出土の杯にきわめて類似している。

以上述べた3住居跡出土の土器は、土師器杯で内黒のI類と非内黒のII類が共伴し、杯I類はすべて栗圀式とみられる点で共通しており、さらにSI168とSI170に土師器杯I A3類が、SI168とSI175に日の出山窯跡や木戸窯跡出土のものと類似した須恵器杯が共通してみられることなどから、時期的に大きな隔りはなかったものと考えられる。これらの年代は、日の出山窯跡と木戸窯跡がともに多賀城の創建瓦を焼成した窯であることから8世紀前半頃と推定される(註4)。

なお、検討を加えなかった他の住居跡出土の土器もこれらの住居跡出土のものに類似しており、ほぼ同時期のものとみられる。

つぎにSK189土壇出土の土器について検討する。

SK189土壇からは多量の土器が出土している。土師器で器形の判明するものには、I B2類とした内黒で口縁部外面がヘラミガキ調整された丸底気味の杯があり、これは国分寺下層式とみられるものである。須恵器杯にはII A類としたヘラ切り無調整のもの、III A類とした糸切り無調整のもの、IV C1類とした底部全面に回転ヘラケズリを施したものがみられ、量的にはII A類が10点、III A類が2点、IV C1類が1点でII A類が主体を占めている。こういった底部の特徴とその出土傾向および各杯の器形や法量的な特徴は、志波姫町糠塚遺跡第1群土器(註5)に共伴した須恵器杯や築館町伊治城跡のSI04住居跡(註6)など出土の須恵器杯と類似している。また、SK189からは体部下半に直線的な稜をもつ高台杯が

6点出土しているが、これらと類似した器形の高台杯はやはり伊治城跡のSI25住居跡(註7)などから出土している。ところで、伊治城跡のSI04・SI25住居跡出土の土師器はいずれも非ロクロ調整の土師器杯と非ロクロ調整の甕およびロクロ調整の甕が共伴するといった特徴をもつものであり、その年代は8世紀末頃と推定されている(註7)。SK189出土の土師器にはロクロ調整のものは全くみられないことから、やはりロクロ調整の土師器を全く含まず、伊治城跡の土器群よりも若干古い様相をもつ糠塚遺跡第1群土器に近い時期のものと考えられ、年代的には8世紀後半頃とみることができる。

これまでの検討により、C期の遺構には8世紀前半頃とみられる多数の竪穴住居跡と、これらと年代を異にする8世紀後半頃とみられるSK189土壇が含まれていることになる。したがって、C期は8世紀前半のC1期と8世紀後半のC2期に細分して把握することが妥当と考えられる。

最後に、重複関係では属する遺構期が不明であった㊤土壇と、④のSB160A・B建物跡について検討してみたい。

㊤土壇としたSK184・185・188は平面形、規模、形態、堆積土に強い共通性がみられることからほぼ同時期に掘り込まれた同じ性格をもつ土壇と考えられる。遺物はSK184とSK188から比較的多量の土器が出土している。SK184土壇出土の土師器には内黒のI類が8点と非内黒のII類が4点あり、I類はすべて栗罎式のもので、II類には口縁部が直立するIID類がみられる。SK188土壇からは栗罎式とみられる土師器杯I類が23点出土しているほか、須恵器杯にはIB2類とした静止糸切りで底部周縁と体部下端に手持ちヘラケズリを施したもの、IVB2類とした底部全面と体部下端に手持ちヘラケズリを施したもの、IVC2類とした底部全面と体部下端に回転ヘラケズリを施したものが各1点ある。これらのうちIB2類は多賀城の創建瓦を焼成した日の出山窯跡に普遍的にみられる特徴の杯であり、IVB2類の杯の器形や法量も同窯跡出土のものにきわめて類似している。したがって、SK188土壇は竪穴住居跡群と同様に8世紀前半のものともみることができ、SK184・185も含めて㊤の土壇はC1期に位置づけることが妥当と考えられる。

④のSB160建物跡では古い方のA建物跡の柱穴埋土から少量の土師器・須恵器片と共に須恵器蓋が1点出土している。この須恵器蓋は頂部が周縁部より若干高まる扁平な擬宝珠形つまみをもち、天井部が回転ヘラケズリ調整を受けて平坦になっており、体部は斜めに直線的に下降して口縁端で直角に折れ曲がる器形のものである。こういった特徴をもつ蓋は糠塚遺跡の第1群土器を出土する第13号住居跡、伊治城跡SI04住居跡、大衡村亀岡遺跡第1号住居跡(註8)などヘラ切り無調整の須恵器杯を主体とする8世紀後半～9世紀前半頃とみられる遺構から出土しており、本建物も8世紀後半以降に建てられたものと考え

えられる。また、新しい方のB建物跡の柱穴埋土からは比較的多量の土師器片や須恵器片が出土しているが、土師器にはロクロ調整のものは全くみられない。ロクロ調整の土師器は伊治城跡の調査により、8世紀末頃に出現することが知られており(註7)、9世紀以降杯類はすべてロクロ調整のものになることを考慮すれば、SB160B住居跡はロクロ調整の土師器が出現する前に建てられた可能性が強いとみることもできる。なお、今回の小館地区の調査ではロクロ調整の土師器は1点も発見されていないことから、この地区にはロクロ土師器出現以降の古代の遺構はほとんどなかったものと考えられる。

以上によりSB160A建物は8世紀後半以降、これを建て替えたSB160B建物はおおむねロクロ土師器が出現する8世紀末以前に構築されたものとみることができ、SB160A・B建物跡の年代は8世紀後半頃と推定することが可能であろう。したがって◎のSB160A・B建物跡はSK189土壇と同じC2期に位置づけることが妥当と考えられる。

これまで述べてきたように、C期については、C1期の竪穴住居跡群と④土壇が8世紀前半頃、C2期の◎土壇と④建物跡が8世紀後半頃という年代を推定することができたが、A期、B期については出土遺物が少ないため、年代を限定できなかった。しかし、これらはいずれも栗圀式期に属し、C1期に先行するものであることから、7世紀末から8世紀初頭頃にかけての年代を推定しても大きな誤りはないものと考えられる。

小館地区で検出したすべての遺構について遺構期ごとにまとめ、年代を示すと第11表の

遺 構 期	遺		構		年 代
	掘立柱建物跡	竪 穴 住 居 跡	土 壇	溝・土塁	
A 期	SB151・SB153 SB158・SB159		SK178 SK186 SK187		(7世紀末以降)
B 期	SB152・SB157 SB154・SB161 SB155・SB156				
C 1 期		SI162・SI168・SI174 SI163・SI169・SI175 SI164・SI170・SI176 SI165・SI171・SI177 SI166・SI172 SI167・SI173	SK184 SK188 SK185		8世紀前半頃
C 2 期	SB160A・B		SK189		8世紀後半頃
D 期				SX190 SD179・SD181 SD180・SD182	中 世

第11表 小館地区遺構期

ようになる。

### (3) 小館地区の性格

今回の小館地区の調査のおもな目的は、瓦の散布により想定された城内地区第Ⅱ期に後続する官衙中枢部を検出することと、その前後の時期におけるこの地区の使われ方を究明することにあつた。調査の結果、この地区には7世紀末頃以降8世紀後半頃まで、A期：掘立柱建物跡群・土壇群→B期：掘立柱建物跡群→C期：竪穴住居跡群・土壇群→C2期：掘立柱建物跡・土壇、といった遺構の変遷がみられ、中世のD期には大崎氏の居城に関わる土塁や溝が構築されていたことが判明した。このうち掘立柱建物跡はA期、B期、C2期にみられるが、いずれも小規模な建物跡で、その配置にも、特に計画性は認められなかった。したがって、各遺構期ともにこの地区が官衙の中枢部であったとは考えられず、想定された官衙中枢部は、すでに大きく削平を受けている陸羽東線より東側の地区に存在していたものとみられる。しかしながら、今回の調査で前述したような遺構の変遷を把握し得たことは、本遺跡の全容を解明するうえでは大きな成果であったと考えられる。特にC2期を除く各時期に掘立柱建物跡が存在したことは、この地域が少くともこれらの期間、官衙域の一部として機能していたことを示すものであり、第1次・2次調査の城内地区の成果と合わせて本遺跡の官衙の分布を年代的に把握する手がかりを得たと言える。また、各期の遺構が示すように遺構の構成が時期によって異なることから、本地区の性格も年代によって変化していったことがうかがえる。各期がどういった性格のものであったかについては、来年度も本調査区の隣接地を調査する予定であり、その成果をまわって、第1次・2次調査との関連も考慮し、総合的に検討してゆきたい。

## 2. 内館地区

内館地区の調査は、この地区の畑地に多量の炭化米が散布することから倉庫跡の存在が予想されたため、その解明を目的として実施したものである。調査の結果、この地区では柱列1、竪穴住居跡1、土壇2、溝10などが検出された。以下、順に検討してゆく。

SI197住居跡については、北半部を検出したのみであり、大部分が調査区外にあるため、一部の断ち割り調査を行ったが、精査は実施していない。したがって、規模・構造や正確な年代は不明である。

SD203溝はSA208柱列跡、SD202・204・207溝と重複しており、これらのいずれよりも古い。この溝の堆積土上層には宮城県北部に広く分布し、10世紀前半頃に降下したと考えられている灰白色火山灰層が認められることから、その年代は10世紀前半以前のものとみる



ことができる。

SA208柱列跡は東西3間分を検出したのみであり、その性格は不明である。年代は柱穴が前述のSD203溝の堆積土上面から掘り込まれていることから10世紀前半以降とみられ、後述する中世と考えられるSD204溝によって壊されていることから、古代末ないし中世と推定することができる。

SD198はSI197住居跡より新しい小規模な溝で、堆積土中に灰白色火山灰をブロック状に含むことから10世紀前半以降のものと推定されるが、出土遺物がなく年代は限定できない。

SD200・202・205は方向・規模・堆積土が共通する小規模な溝であり、SD202がSD203より新しく、後述する中世とみられるSD204よりは古いことから、これらは古代末ないし中世の遺構と推定される。

SD207は他の溝とは方向を異にする小規模な溝であり、前述のSD202より新しく、SD204よりは古いことから、SD202と同様に古代末ないし中世の遺構とみられる。

SD195・199・204・206は方向が一致する比較的大規模な溝で、SD204がSD203溝より新しく、さらにSD195から青磁皿や中世陶器片、SD199とSD204からは石臼の破片が出土していることから、小館地区の溝と同様に中世の名生城に関わる内館地区の区画溝と考えられる。

SK201は中世とみられるSD196溝より新しい溝状の土壇で、年代は中世ないし近世以降のものと推定される。この土壇の堆積土上層には多量の炭化米が含まれており、内館地区に広く散布する炭化米はこの時期の遺構に含まれていたものである可能性がきわめて強いものと思われる。

以上のように、内館地区では古代の堅穴住居跡・溝、古代末ないし中世の柱列や小規模な溝、中世の名生城に関わるとみられる比較的大規模な溝、中世以降とみられる土壇などを検出した。今回は小範囲の調査にとどまったため、これらの遺構の解明には今後この地区についてさらに調査を行う必要がある。

なお、本調査の契機となった炭化米については、調査の結果、前述したように古代の倉庫に起因するものなどではなく、中世以降のものと考えられる。

註1 宮城県教育委員会『日の出山窯跡群』宮城県文化財調査報告書第22集 1970

註2 桑原滋郎・辻秀人『長根窯跡群Ⅲ』涌谷町教育委員会 1976 p.20

註3 加藤道男・阿部博志「(3)観音沢遺跡」宮城県文化財調査報告書第72集『東北新幹線関係遺跡調査報告書-Ⅳ-』1980 pp.131~349

註4 多賀城の創建年代は養老年間から神亀年間頃と考えている。

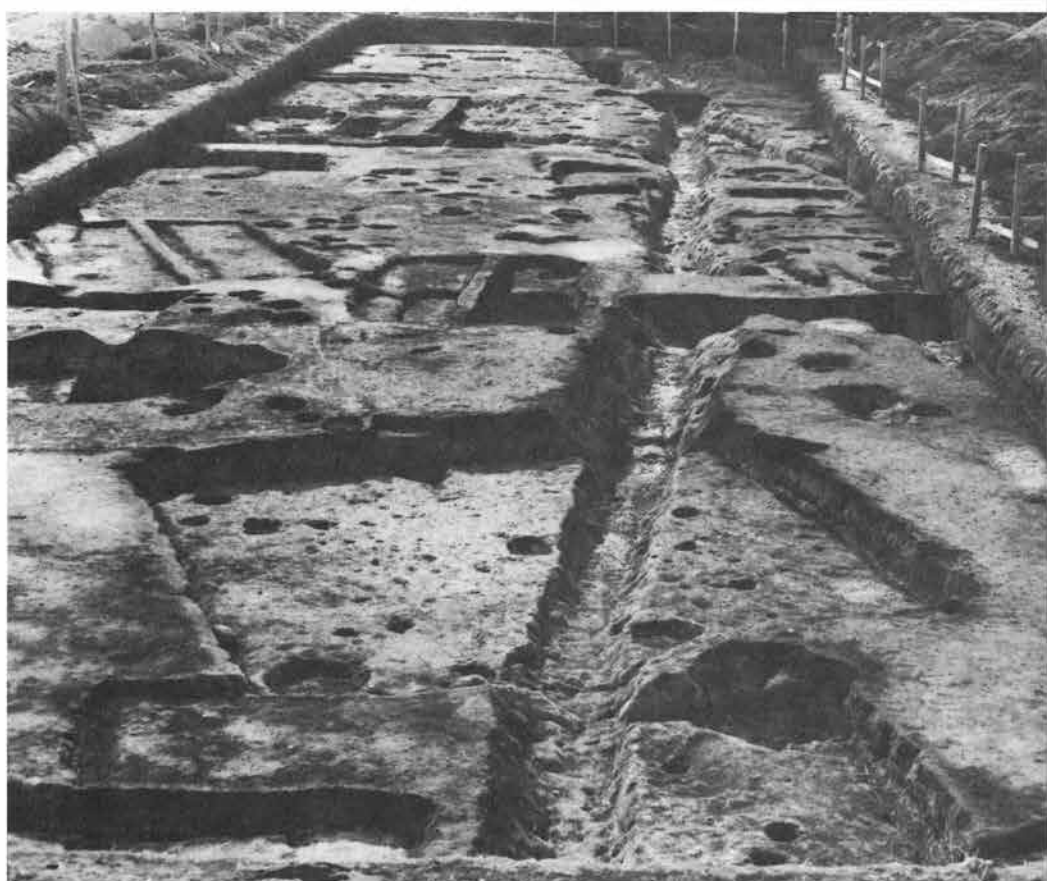
宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡 政庁跡本文編』1982

註5 小井川和夫・手塚均「(1)糠塚遺跡」宮城県文化財調査報告書第53集『宮城県文化財発掘調査略報（昭和52年度分）』1978 pp.44～198

註6 宮城県多賀城跡調査研究所『伊治城跡Ⅰ』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第3冊 1978

註7 宮城県多賀城跡調査研究所『伊治城跡Ⅱ』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第4冊 1979

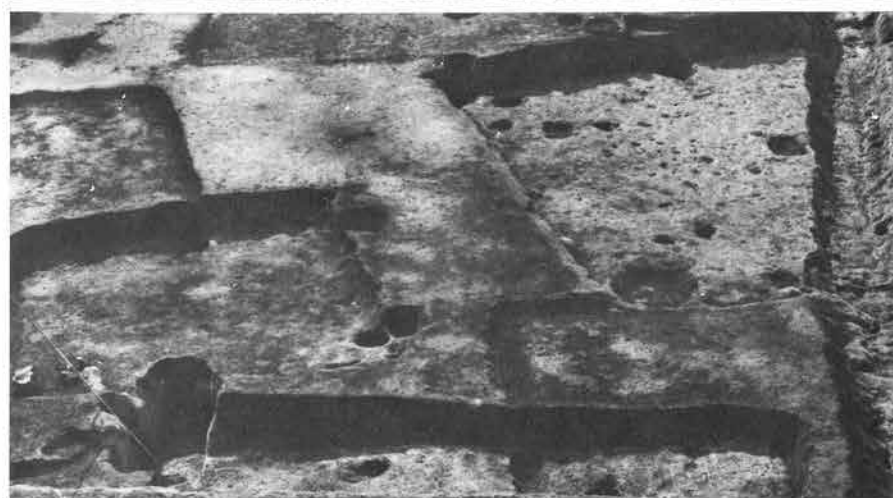
註8 東北学院大学考古学研究部「第1部 亀岡遺跡発掘調査報告」『温故 第12号』1979 pp.1～143



図版 1

上：小館地区全景（北から）

下：小館地区全景（北から）

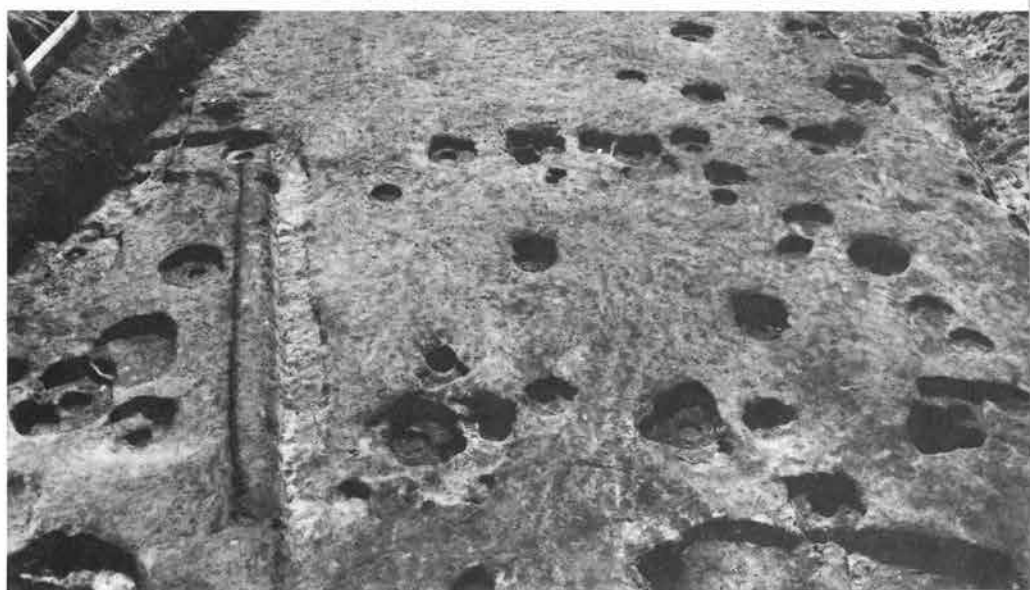


図版 2

上：調査区南半部  
（北から）

中：調査区中央部  
（北から）

下：調査区北半部  
（北から）

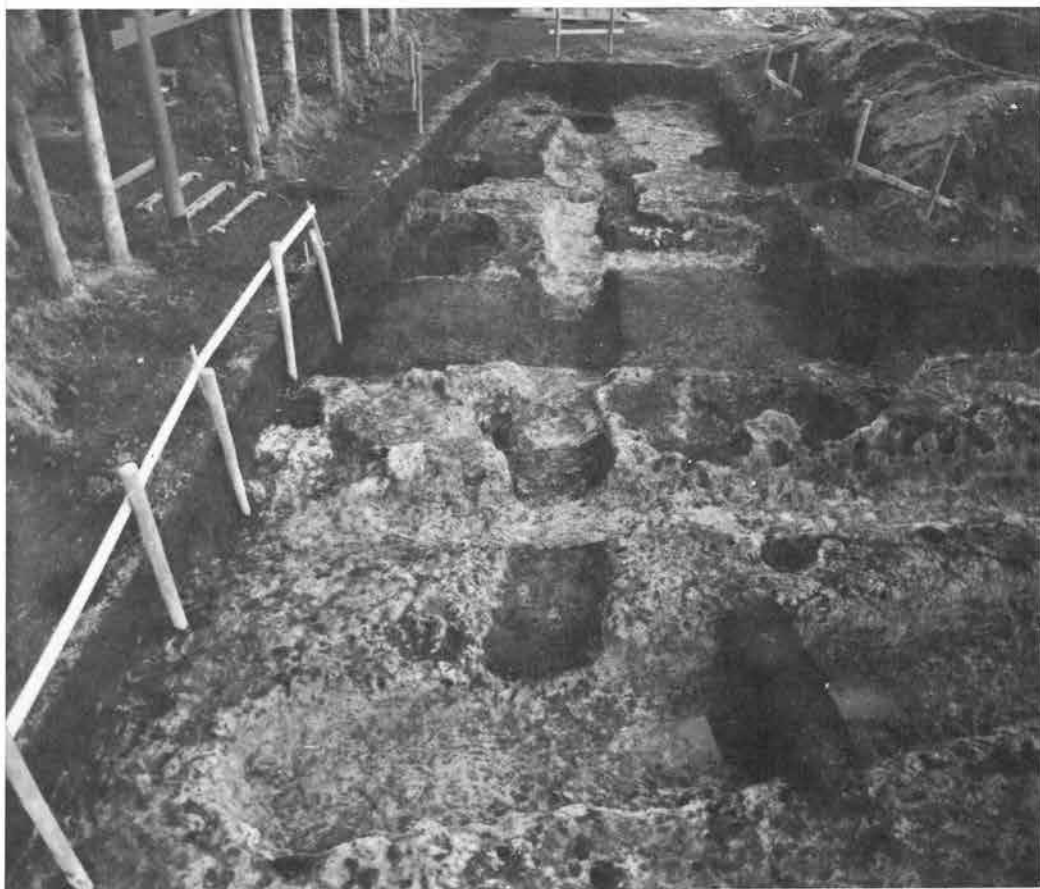


図版 3

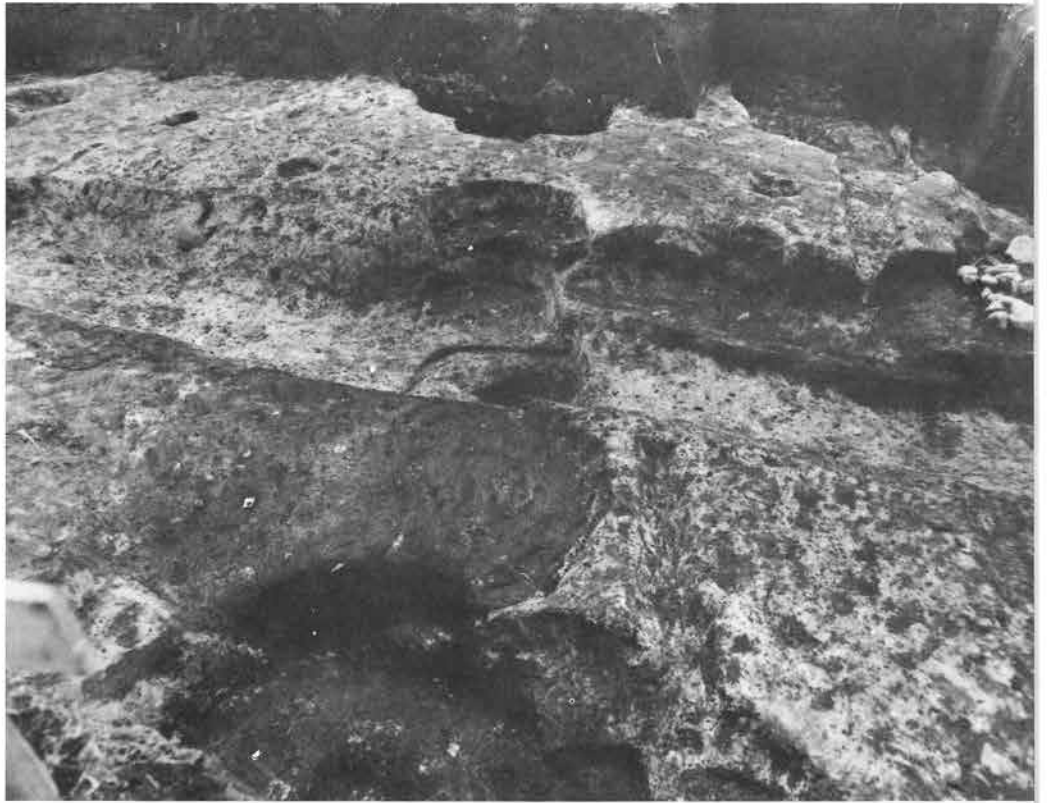
上：SB154建物跡  
（北から）

中：SB155建物跡  
（北から）

下：SB157建物跡  
（北から）



図版 4 上：調査区南端部の遺構の重複状況（東から）  
下：SB160A・B建物跡、SD182・183溝（東から）



図版 5

上：SB160A・B建物跡東妻  
（南から）

中：SB160A・B建物跡西妻  
（南から）

下：SB160B建物跡南西隅  
柱穴断面(北から)



図版 6

上：SI 164 竪穴住居跡  
（西から）

中：SI 168 竪穴住居跡  
（南から）

下：SI 170 竪穴住居跡  
（南から）





図版 7

上：SI173 竪穴住居跡  
（南から）

中：同上カマド  
（南から）

下：SI176 竪穴住居跡  
（西から）





図版 8

右上：SD179溝（南から）

左上：SD181溝（南から）

下：SD180溝（西から）



図版 9

上：SK184土壇  
（西から）

中：同上断面  
（南から）

下：SK186土壇断面  
（南西から）





図版10

上：SK189土塚（北から）

下：SX190土塚断面（東から）

図版11

上：内館地区全景（西から）

下：SI197竪穴住居跡（東から）





図版12

上：SD195大溝(北から)

中：SD199溝(北から)

下：SA208柱列、SD203

・204・205・207溝

(北から)



1



7



2



8



3



9



4



10



5



11



6

图版13

- 1. 須惠器杯(第13图1)
- 2. 須惠器杯(第19图9)
- 3. 須惠器杯(第19图10)
- 4. 須惠器杯(第19图8)
- 5. 須惠器杯(第15图3)
- 6. 須惠器杯(第19图4)
- 7. 須惠器杯(第1层)
- 8. 須惠器杯(第12图7)
- 9. 須惠器杯(第19图6)
- 10. 須惠器高台杯(第19图14)
- 11. 須惠器盖(第8图1)



1



5



2



6



3



4

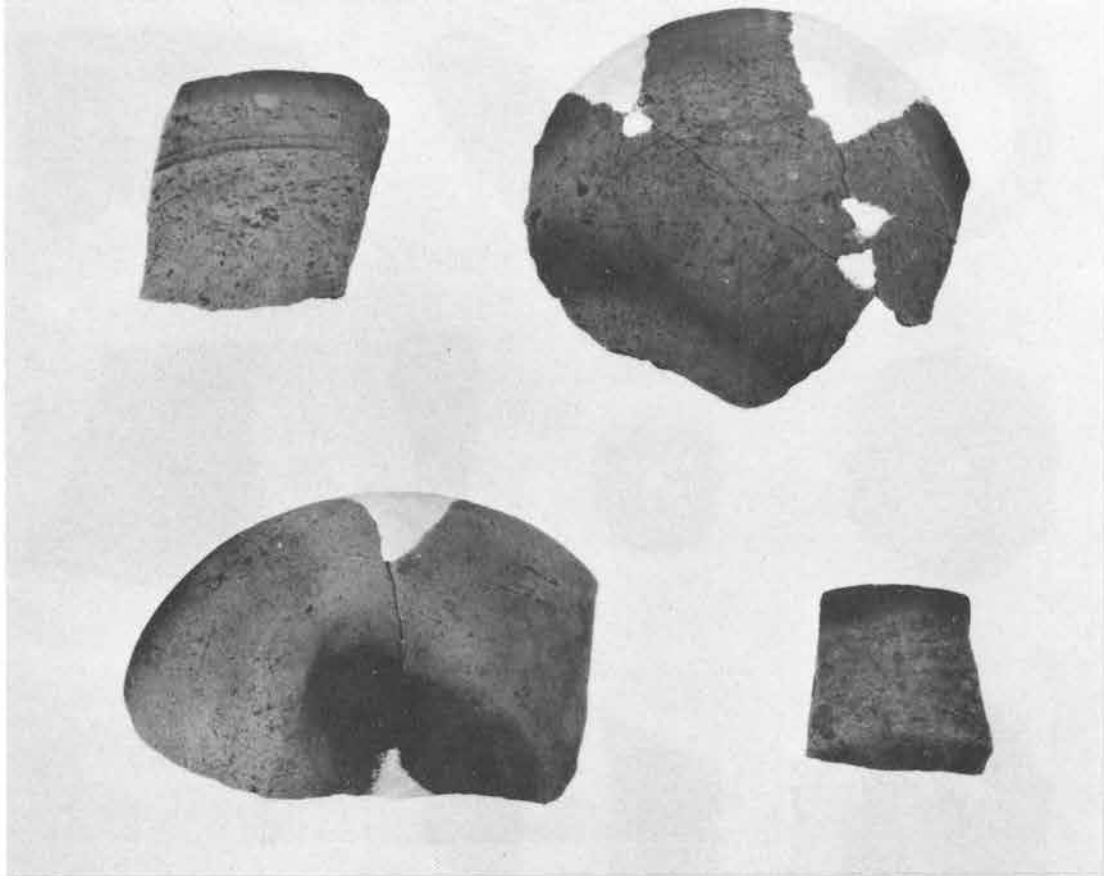


7

図版14

- 1. 土師器杯 (第18図 1)
- 2. 土師器杯 (第20図 2)
- 3. 土師器杯 (第12図 3)
- 4. 土師器杯 (第20図10)
- 5. 土師器杯 (第15図 5)
- 6. 土師器鉢 (第12図 3)
- 7. 土師器碗 (第15図 6)

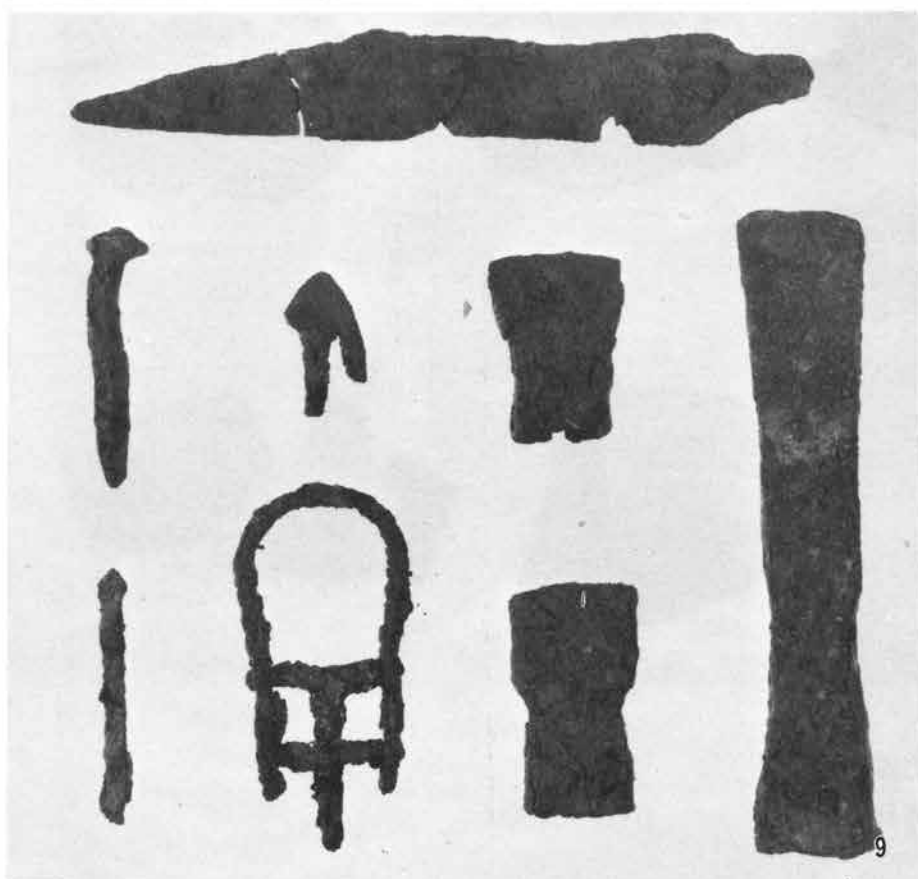
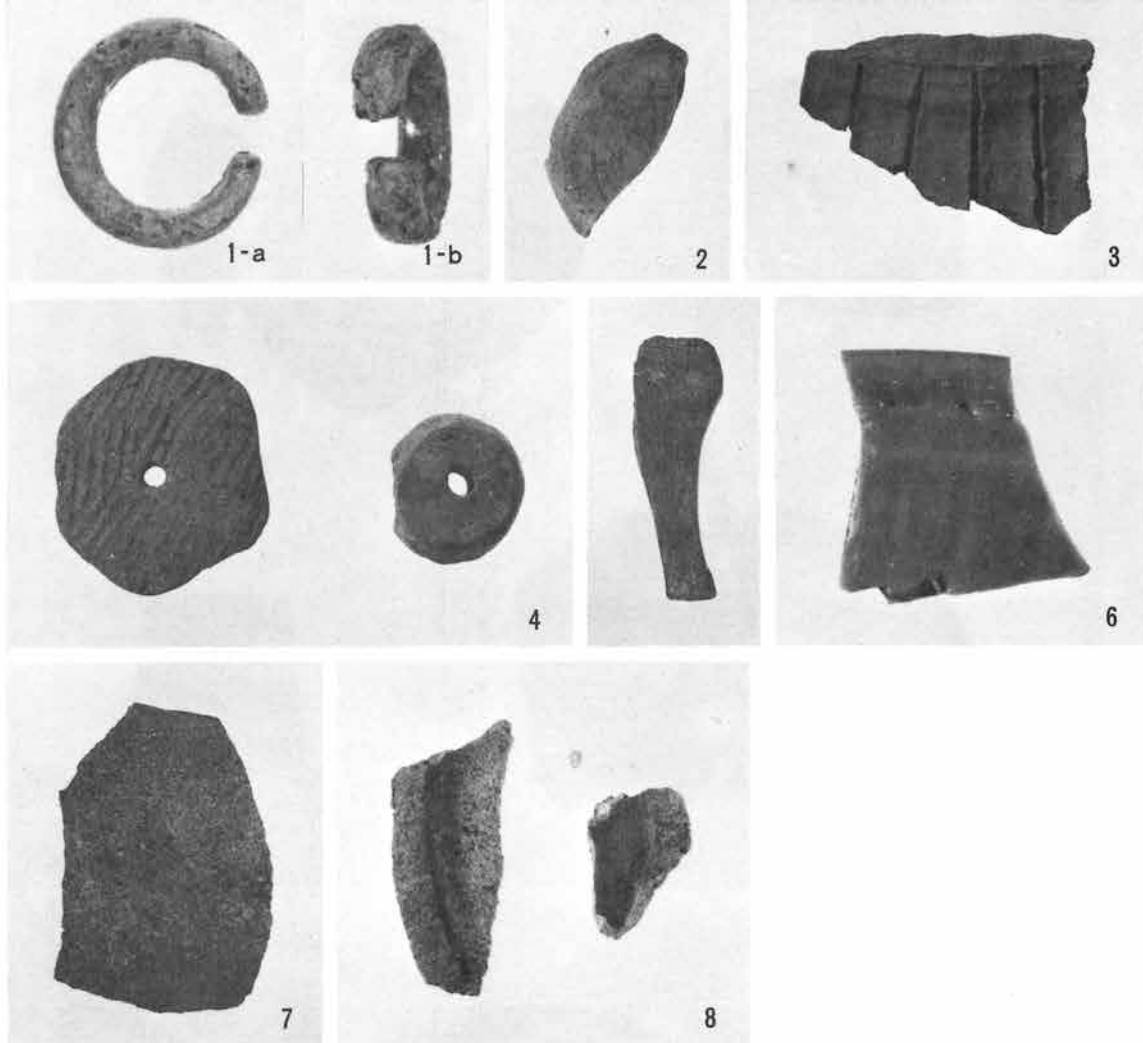




図版15

上：小館地区出土の土師器（在地系）

下：小館地区出土の土師器（関東系）



图版16

- 1.金 環 (SK187)
- 2.墨書「市」須惠器杯底部  
(第19図13)
- 3.円面硯 (第1層)
- 4.紡錘車 (右:第1層  
左:第2層)
- 5.砥石 (SI197)
- 6.青磁 (SD195)
- 7.中世陶器 (第22図1)
- 8.石臼 (SD199)
- 9.金属製品 (小館地区)

---

多賀城関連遺跡発掘調査報告書第8冊  
名生館遺跡Ⅲ

昭和58年3月25日印刷  
昭和58年3月31日発行

発行者 宮城県多賀城跡調査研究所  
多賀城市浮島字宮前133  
TEL (02236) 8-0101  
印刷所 小泉印刷株式会社

---